

回水園集

全

187

426

085757-000-6

187-426

回水園集

中島 宜門/著

M39

DBD-0270



中島宜門著

回水園集

全

小山氏藏

回水園集序

藩制中我因伯文學以歌道爲最盛有若飯田
樟齊石園父子小谷杉園門脇蝶園新真木園
諸先輩俱承梯園之衣鉢以顯焉回水園中島
宜門翁與之上下角遜相共鳴其盛明治維新
後諸氏或登朝官或甘隱栖相繼飄零逝謝而
翁獨存久爲斯道之巨匠人之間鳥取歌人者
必屈指於翁矣翁嗜古學初衣川瓊齊之就暇
於鳥取藩也文政中翁與樟齊等先入其門勤
勉精苦又就齊藤彦麻呂伴信友問古典就梯

明治

55 5 9

广

回水園集序

藩制中我因依

文學以歌道為最盛有若飯田

樟齊石園父辛

小谷杉園門脇蠖園新真木園

諸先輩俱承梯

園之衣鉢以顯焉回水園中島

宜門翁與之上

下角遂相共鳴其盛明治維新

後諸氏或登朝官或甘隱栖相繼飄零逝謝而

翁獨存久為斯道之巨匠人之問鳥取歌人者

必屈指於翁矣翁嗜古學初衣川瓊齊之就叟

於鳥取藩也文政中翁與樟齊等先入其門勤

勉精苦又就齊藤彥麻呂伴信友問古典就梯

明治

57 5 9

內交

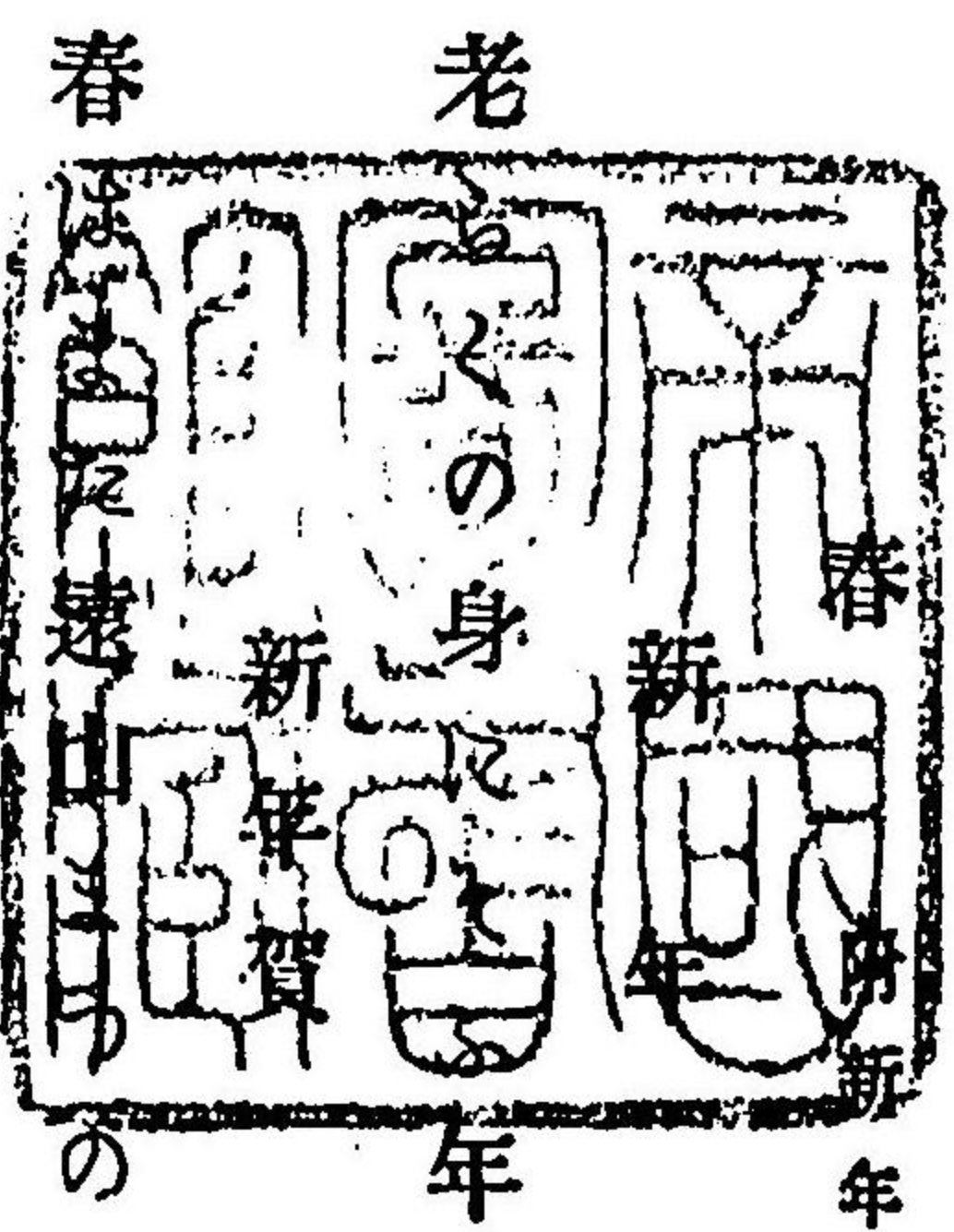
園質詠歌、自幼及老、孜孜如一日、其歌雖宗梯園、而別立風格、纖麗綽約、饒姿態、筆札明媚、如其歌、嘗慨因伯近古詠歌、無統諸、撰稻葉和歌集二卷、行於世、翁起身寒微、奉職五十餘年、勤恪畏謹、不少懈、藩主池田侯、屢賜賞進格、特召聽講說、是正詠歌、又命講古典於藩學、既老、或奉祠、或授徒、徜徉自娛、余曾在皇學寮、辱忘年交、往年歸省鄉里也、同人共遊樗溪、翁白髯青衫飄然而來、蔭嘉樹、俯清泉、酌酒詠歌、叙舊談懷、清遊半日、宛如神仙中之人、時年八十有五

矣、可謂眉壽康寧也、其後四年、以老病而歿、其子小山君、宜行欲刻其遺稿、來屬序於余、嗚呼、近時詠歌大行、而淺薄輕佻、日陷卑俗、故老凋謝、無能撐頽瀾者、而今復失翁、余豈得不爲斯道惜哉、然翁身雖亡、而其歌永傳於世、則爲不朽焉、差足以慰情耳、乃不辭不文、題一言於卷首云、

明治丙申清明前二日題于平安桃花坊長春園之東軒

鳥取 湯本 文彦

回水集園



老の身は立にけり今こん春はなほまたれつゝ
春の枝きりて年たつ門にけふたてつなり
五十になりける年のはしめに

試筆

朝さらす向ふ机につくくとことしはちりもすゑしとを思ふ
試筆に畫なとめきて

あたらしき年も立枝の朝日影うめか香ながら寫す窓哉

年の初に思ふ事ありて

老の身はまつともなき松の戸も猶千代いはふ年立にけり

立 春

ことなくて暮ぬといはふさかみつき酔はてぬまに年立にけり
いつしかとまちしなからの轉寢にぬきめのとけき春は來にけり
百年の春はへぬとも老せしと思ふや今朝の心なるらん
しめ繩のし陀の影くむいさらひに春もうかひて朝日さすなり
夢さむるねくらのとりのひと羽ふり身にそふ春を今かするらん
うちつけにのとけき今朝の初ぬきめ惜みし年や身を放れけん
ゆくと來と送り向ふる中空のとしのさかひは今をしらめる
きのふこそ年はたちしか天地に春のひかりはけふそいたれる
年は今たちかへるらしいなは山松をはなる、峰のよこ雲

つねたにもぬきめたのしきとりかぬを今朝立はるの初耳にして
小松原はるたちかへる朝風に千代の川浪とゑあはすなり

江戸にありける年春たちけるに

あら玉の年のゆき來の急きさへ草の枕はかり初にして

春色浮水

かはな草とくも初て薄氷の下にもうかふ春のいろかな

春の始に江戸に在て

春の色はまた淺草の川水に花とうかへる舟も有けり

春色在野

もゆとなき芝生の上も雪消て春あらはるゝ野邊の色哉
聲ぞのみ春とはきゝし鶯のうは毛の色に野はなりにけり

早 春

春なれやさゆる雪解の末ながら霞をめたる山本の里
しかすかに雪解の雫れとはして松風寒し木かくれの里

子日興

子の日する野への小松に引そへておへらまほしきうくひすの聲

若菜

鶴はきにもすそかゝけて行子等や千代の川邊の若菜つむらん

氷始解

春なれや氷る谷間も朝彦の影さす片瀬とけ初にけり

鶯

柳にも梅にもまちし春ながら今朝うれしきはうくひすの聲
わか園にかひならさねと鶯にねさめとはれぬ朝たにゆなし
たりたちて摘みつゝきかん井川や竹田の原のうくひすのこゑ

月影も身にしむ窓の明ほのをわか世になせる鶯のこゑ

待鶯

石そゝく山の雫も聲たてつ鶯さそへ谷のはるか勢

朝鶯

夜もすから耳すましつつ谷水のゆくへしらみて鶯のなく
今朝きなきいままた旅なる鶯の宿にかさまし庭の竹村
契りおくものとはおしに朝なくまてはたかへぬうくひすの聲
鶯のこゑを枕の朝ほらけとたぬと夢もうれしかりけり
朧夜の名残しつけき山のはハ霞にかりてうくひすのなく

谷鶯

耳あるふ心ちさへして谷川の清きあたりはうくひすのなく

山家鶯

とひよればあるしは見ぬす山陰の庵もりかほに鶯のなく
閑居鶯

いきたなき朝いの夢を鶯にはしきられてもさむる宿かな
行路鶯

とめくれば道も絶にし山陰のさゝ生なりけり鶯のこゑ
鶯入新年語

大君のみよの光のくまやなき年たつ谷に鶯のなく
鶯の歌よめる中に

もし人のとひもや來ると待しまにきゝふりにけり鶯のこゑ
鶯のまたとゝのはぬ初聲にうなぬはなりの昔をそねもふ

掘をへたてゝかなたにのみの鶯なきければ
われこそあれ若木の梅は咲ぬるをほとへたてゝも鶯のなく

梅

梅の花さけるさ枝のひまを多み影さす月もかざる夜半哉
つゝましき老の心の花をみもこゆるゝはかりうめ咲にけり
老かくす笠てふ梅の花しあればなほ春あまた重ねてもみん
鶯の聲をたつねてとひくれば去年見し梅の垣根なりけり

山家梅

東風ふけは杉生の窓をあかくかれて梅もうき世の袖もとむなり
鶯もまたとひなれぬわか門のさゝ垣つたひうめかざるなり
色香しる人もとひこぬ山窓にひとりゑみして梅さきにけり
鶯に花の宿かず梅か枝はわか山里のあるしかりけり
松の戸や誰かためとなくさゝかぬつ梅ゝ深き夕暮の空
柴の戸の雪のかこひもきのふけふいふせく見ぬて梅咲にけり

庭上梅

雪折し竹より奥の庭つたひかよふあらしに梅かをるなり

水邊梅

とけ初し門の板井のひもかよみうつる日影に梅かをるなり

川邊梅

かをり来る夕川かせをよすかにて梅咲きしに舟はつなかん

遠村梅

雪消てひとむら白き山陰やにほへる梅のはやしなるらん

故郷梅

人まちて袖にかをれる故郷のうめの心もかつそかかしき

貧家梅

庵はあれて人こそ見ぬ驚にとはれんばかり梅咲にけり

梅多春友

うつほ木とかりてさきそふ梅みれは嬉しき老の友も有けり

紅梅

雪のうちには草の色たにゆかしきを紅にほふ梅さきにけり
いつしかと雪の凩にぬれくし梅はこそめのひも解にけり
誰かための思ひの色の梅の花春のかかめにぬれて咲らん
庭もせに青むつゝしも紅のやしほの梅のそめ草にして

梅を四季に分けてよめる中に夏

葉かくれに數見ぬ初し梅の實の照まされとも雨そはれせぬ

む月のはしめ向島の梅見よものしけるに今やうの歌舞を聞て

いちはやきみやひなりけり梅園は鶯ならぬはるのしらへも

柳

青柳はむちにきるへくなりけり心の駒も野邊にはなたえ

柳 露

吹みたる風のたに間を白露のまちにて結ふ青柳のいと

故郷柳

まり庭の昔なからの玉柳おもる露さへなつかしきかな

閑居柳

わか門のいつもと柳いつもくかとはらへともくる人もなし

春 雪

梅か香のもりくる窓のひまにのみ春を残してふれる雪哉

春おれやけふも終日ふる雪のやむとはなしにつもらざりけり

残 雪

雲雀なく聲より上に残りけり夕日に霞む峰のしら雪

山高み残れる雪も此ころは花のそら目にかよりのみして

餘 寒

折さしゝ梅はやつれし花瓶の水もこほりにかへるはるか

霞

富士の嶺の神代の雪も武藏野の霞の奥に消る春かな

朝 霞

山からすなきてほとふるわか岡になほ夜を残す八重霞かな

海 邊 霞

海こしの山もほのかに見ぬ初て霞を出るあまのつりふね

若 草

日にそひて雨にもぬそふ庭草のかけのくち葉はいかに成けん

閑庭若草

人こそあれ春の光はうとからぬ垣根の小草もぬ出にけり

春 雨

朧夜のなこりなから朝くもりやめて静けき雨になりつゝ

市 春 雨

やちまたのちりとつめてふる雨に市の植木はけふりそめつゝ

行路春雨

わけくれは霞ハはれて山がたの朝菜の露に雨かきなるなり

浦 春 月

浦船も月のゆくへもかすむ夜にひとりさやけき芦鶴の聲

山家春月

都人かへり見すらんわか山のはかより上に月は出にけり

名所春月

花とのみたもふ心ハ淺かりき吉野の奥のはるのよの月

歸 鴈

歸る鴈妹かしまわやたちつらんかたみの浦に聲のかすめる
風わたる門田の麥の莖たちに鴈もこゝろやうこき初けん
行鴈のこゑもま遠に暮初てほのみか月の影をかすめる
春じらぬ雪さへあるをいなは山いなは今とや鴈はたつらむ
またもこん秋はま遠の松山になく音かすみて鴈をゆくかる

燕

ゆたぬまく棚田やいかにわか宿の軒のつはめは新巢つくれり
歸り来てすたちし軒やたつぬらんうひくしくも啼つはめ哉

雉 子

片山はかすみにもる明くれの小松か原に雉子なくなり

朝ほらけ匂ふ霞の八重垣に雉子なくなり妻やこもれる
月落して今かたつらん狩人の眞弓か岡に雉子なくかり
のとかにもあらぬ雉子の聲すなり蕨をる子やおとろかしけん

雲雀

大かたもうかるゝ春の人こゝろ空になすまてなくひはり哉
雪解る山田の麥生うちけふり匂ふ朝日にひはり鳴なり
ひまもなくあかるひはりか中空の春なにはかり樂しがるらん

朝雲雀

朝つくようするゝ影のそことなく霞む田面に雲雀なくなり
野遊

あくまでもたゝしと思ふ春の野をいつこに急くてふの心を
さらにけふわらは心にたちかへりすみれ咲野をいくめぐりせし

水郷春望

すみ田川かすみを流す朝東風につゝみの花の見ぬかくれして
菜花

雪わけてきのふかつみし山かたの畑の若菜は花になりにき
三月三日ひいな遊びを

遅日

みそきせし其かたしるも吉野川なかれてのよは花になりつゝ
なそへなきあたら春日を長しとて何いたつらにうみくらすへき
春曙

何からぬ雲雀の床の麥生にも心やらるゝ春のあけほの
三月十九日鶴殿氏と伴ひ圓山にて

けふはまたすみれ咲野の道かへて濱松かけの露やひろはん

春望

見るかうちにうしほは引て沖津島かちゆくばかりなれる海哉
花

櫻さく山にしくれは世の中のうきハ身にそふものとしもなし
有はては人の心やうつろふとまたきに花はちりそめにけん
ちるかたにうきをも見せて世の中のあはれをつくす山櫻かな
春かせもさそひかねてやすきつらん霞にゆらく花たにもなし
吉野山花さく頃の朝かくきのふの跡をうつむしら雪
あたはのみ咲ちる花か吉野山春もはしの夢のわたりは
きのふまつれなく見ぬし雪消て山のは白し花やさくらん
かたはらにたてるものから三山木の蔭もゆかしき花盛かな
奥をのみたつねくして山口の花なつかしくかりにけりかな

きのふけふうなるか友の圓居さへまがきの山の花陰にして
植と世を思ひかへせは庭櫻ひとりふりぬる吾身ともなし
待花

まやまやく烟を見てもたほしく心の奥に花をまたるゝ
咲と見と夢のうらさへ悔しきは今朝も色めく梢たになき
雨中待花

しくくにふり来る雨か山里の花のつかひのかよらましかわ
初花
待わひてねふる小蝶と見るはかり末枝の花は咲初にけり

夕花
今はとてたゝんとすれば花陰の苔のむしるに月も匂へり
山花

折かきし歸るを見れば山賤も時にあふこの花の家つと

山家花

山賤か小柴なからに結こめと垣生の櫻今さかりかり

霞中花

うすれ行霞のまより見は初て花なつかしき朝ほらけ哉

名所花

飛鳥山あずもとたのむ夕榮の木の間の日影花くもりせり

行路花

風わたる杉の下道ゆくくもちりて見そめし山さくらかな
見る花に心の駒のつなかれてかへる道にはすまさりけり

老人花見

春ことに吾こそ先と思ひつゝことしも花にちりれくれけり

花下言志

花なくは春とてけふもくる人のうときをさのみ恨しもせし

花にといふことどかしらに置いてよめる歌の中に

花に來て思へはやさし山櫻さく春はかり訪ふことにして
花にゆく旅人ならし三吉野の盛やいつとひかはすなり

松櫻櫻の花見にものして

思ふことなくて花見るけふばかりうき世の外にある身なりけり
立まする松のみとりもけふみれば花の錦の染木かりけり

杉崎の里ある深相寺の糸櫻見にものして

山寺の花の雲井に入にけりうき世にかへる道や絶まじ

落花

かつらきや高まのあらし吹にけりよそになり行花の白雲

かはつなくそともの田井の朝雨に春もものうくちる櫻哉
朝落花

朝きよめいそく心もたゆむらしかつちりかゝる花のとのもり
夕落花

明日まちて見んと思へは山寺の鐘の音にも花そちりける
庭落花

庭さくらみなからさそふ朝風にまかきも花の山となりつゝ
山落花

吉野山しのふ昔のかすくことしもそへてちる櫻かな
思ふ事ありける頃花のちるを見て

なからへて何そはかひと思ふ世にをしまれてちる花も有けり
蛙

清き瀬を花は流るゝ山川のうはらか本にかはつなくなり

夕 蛙

小山田のかひやの烟霞む日のゆふへの雨にかはつなくなり
川そひの柳の末葉なひくまや聲とよもしてなく蛙かな

躑 躑

庭中のこのくれやみをとてらすまで盛に匂ふにつゝこの花
杜 若

から衣たちよる袖も水影の花にすらるゝかきつはたかな
三月廿日はかりものへゆく道にて

釣たるゝ糸かを見ぬし川柳みとりの陰とはやなりにけり
春 朝

東山かずむ朝の見渡らに北野の花をおもひつゝくる

春 野

野邊ゆけは花かけならぬ木村にも春をつくして鶯のなく

春 川

若あゆのひれふる見れは早川の春の淺瀬もあたゝまるらん

春 煙

うはきにる田面の庵の薄けふりうすれもあへす暮初にけり

春 蕙

世はなれし苔の蕙も貴人のあくらとなれる花盛かな

春の歌の中に

すみ田川つゝみの長手ゆきかへり花見し春は忘る世もなし

暮 春

いつしかと日數なかれて櫻川きのふの春も瀬々の白浪

ちる花のそこはかどなき行へこそとまらぬ春の姿あるらめ

夏

首 夏

花ちりし軒の梢にぬるてふの夢のまにこそ春はいにゆれ
櫻川はなの春こそ流れけめなつさひぬへき水の色哉

閑居首夏

隠處は月日のゆくもしらかしのしけるにつけて夏を覺ゆる

遅 櫻

ことさらにおくれて咲る花かたみめからふ頃の色はものかは

山家遅櫻

大かたの世にはれくれて山里にひとり時めく遅櫻かな

新 樹

蛙なく山川よとはわたる日の影もらぬまて若葉さしけり

いつしかと青葉かくれに成にけり木の間に見ぬし山本の里
風わたる若葉の楓かたよりに秋にのみやはこゝろをむへき

新 竹

霜雪の世にまたあはぬ若竹は露を重荷のうきふしにして
聲老て歸る鶯まちはに山の竹の子ふしたちにけり

郭 公

はれし夜の月を心と時鳥なげはや聲のさやけがるらん
ほととぎすほのかに啼て過ぬなり有なし雲の行合のそら

待郭公

雨はれて月も木の間を出にけり山ほととぎすれさらなん

谷郭公

ほととぎす右に左にむきわたる聲の中ゆく谷のほとと道

深夜郭公

ほととぎすまたて初音をきく夜こそぬられぬ老のかひは有けれ

閑居郭公

人こそあれ松の戸さゝぬ夕暮をうとくな過そ山郭公

船中郭公

夜舟こく磯山まつの木の間よりなく音おちくる時鳥哉

早苗

雨まちて植こそわたせみくまりの神の恵みの露の丸ま苗

庭に牡丹の花咲たる頃よめる中に

ねさめしてむかふ園生の深み草小蝶の夢もかくやとそ思ふ

端午

かりふくも長き根さしのあやめ草けふは薫らぬ軒端たになし

梅雨

山の井も淺くハ見ぬす淺香山かけさへ濁るさみたれのころ
石河や岸もくつらゝ梅雨に片淵はなれ鯉たとるなり
卯の花も浪と見るまで池水の岩根をひたす梅雨のころ
中空の雲の行來はしけゝれととふ人そなき梅雨のころ
つくは山雲の袖つく梅雨の雫の田井にかはつなくなり

梅雨晴

めつらしく星影させり夏菊のしほれぬ花も明日は見てまし

水鶏

門たゝく水鶏の聲に夢さめてとのひありきの昔をそ思ふ

夏月

小さく原風まつよはの露の間に影見し月はしらみはてつゝ

夏 草

若草の妻とすみれの花つみし野邊も戀しく夏更にけり
雉子たにかくるひかねし春日野の鹿のふとは草更にけり

庭 夏 草

虫きかん秋まつかねのひと村はかくてこそ見ぬ庭の夏草
植てたにそたぬ花もあるものを拂へととける庭の夏草

野 夏 草

妻とひにやつれし雉子のかげも見ず野寺のかみ草ふけしより

鵜 川

玉くしけふた瀬もささす明にけり鵜舟の竿の短夜の空

螢

身ぞかへてゆかり絶に草村をむつましけにもとふ螢哉

月をそし風やいかにと高殿にぞす巻をれば螢とひきぬ
庭清きさゝれの上の水草に夜咲はなハ螢なりけり
ゆくくも月はうするゝ柳原さやかに見ぬてほたるとふなり

水 邊 螢

夏むしの思ひをうつす水影のかゝみの池は名のみともなし
難波江や芦のはこゆるみつしほに影も流れてとふ螢かな
さよ更てくむ人もなきいさらるに玉ちる露は螢なりけり

夕 顔

口をしの花のちきりや夕貞はかはたれ時を盛にはして

蚊 遣 火

夕されはたぬ宿なき煙かな蚊のいふせきや立まさるらん

蓮

はちす葉のかたふく池の夕風は入日もまたて涼しかりけり
水無月のてる日の色と見るくも涼しき池の花蓮かか

池蓮

かたばかり残り野寺の古池にうき草かくれ咲はちすかな

夕立

した草もぬれあへぬまに夕立のすきの梢は日影こぼれて
露たれと此頃まちと民草のたまの緒ゆらく夕立の雨
あしの海やゆふたつ浪の涼しきハ富士の高嶺の雪けからまし

行路夕立

かへり見る野路の長手はかつ晴て行へにそく夕立の雨
夕立の名残の露を吹風にふたゝひぬるゝ松の下みち

蟬

日をさへん蔭とたのみし松か枝に暑さをそふる蟬の聲哉

扇

さよ更てしめる扇のつまにこそこのひてかよふ秋はしらるれ

納涼

舟はあれとつゝみの並木かけもよし此川つたひ夕すずみせん
世にしらぬ竹のした窓とひよれば風をあるしの夏にも有哉
日をさふる杉の下道すゝしともいはて過行かちひとはなし
蓮葉に池浪こぼてたまのをもゆらくばかりの夕風そふく

六月はかり福地の里大樹寺に行ける時

山寺の住よき程ハ軒端ゆく水の清きにまつくまれつゝ

夏朝

朝つくよ松の戸あけて庭草の露ふむ程は夏としもなし

夏 夕

いさ子とよすたれとくまけ放ち出の夕日は松の西にめくれり

夏 水

みすゝ生ふる石のはさまに落たまる山の雫もぬるむ夏哉

夏 獸

ひくうこの歩みを遅み里の子か歸る門田はくれはてにけり

夏 閑居

ほととぎすすなきつやととふ風流士の聲さへ稀にきく住居かな

夏の歌の中に

きのふけふ雀のひなもすたちつる軒のなてしこ露ふゝむかり

晩 夏

みかり人いるらん時も遠からし矢田野の草生夏更にけり

若竹ものひ果ふけりやかてそのよかかき秋にならんとすらん
晩 夏 虫

なきしきる蟬はこそあれ音にたてぬ螢を夏のくれは見せける

六月 盡

みな月の日かみ流れて夕川のみそきの瀬こそ秋はよるらん

秋

立 秋

垣つ田の早稻の走り穂かつくにけふこそ秋は見ぬ初にけれ
夕雲の亂れをしるき今朝の間の露は秋とも定めかねしを
明日よりは萩にを花にとはるへきまのよしのやに秋は來にけり
まちこひてねし夜なからの手枕に覺れはかはる秋の初風

初 秋

さめ安き老の枕にしられけり夢路や渡る秋のはつかせ
何となき空のけはひも目につくや身をしる秋のはしめ成らん
こと更に水とよきてもれきかねし露は草葉に今朝をあまれる

初 秋 雨

汲ほしゝ庭のいさらぬ水こぼて雨こそ秋はさそひ來にけれ

初 秋 虫

風はまた秋とも告ぬ萩のはの下に聞ゆる虫のこゑかな

初秋の歌の中に

西こそと思ひの外に夕附日さくる影は夏にまされり

残 暑

いつまてか照日に袖をぬらすらん秋まちねても秋とらもなし
秋かせのたちしやいつら葛の葉も夏にかへりて打しほれつゝ
たほへとも猶かけあつき西日さすたれ動かす風もあぐして

七 夕

竹の葉にれく露見れば七夕のあふ夜の空もやゝ更にけり
天の川かたみにぬらす一年の袖もほしあふ今宵ならまし

萩

妹か髪あげ笹は野の秋萩は末もとをよに花かつらせり
おきそはよ花はやつれん露なからはらふもをしよ庭の萩原
きのふけふ清水くむ子か袖の色に井の邊の小萩咲こほれつよ
心とはあらさぬ宿をかりそめの野邊となしても萩をみよかな

庭 萩

きのふけふ庭の袖垣むらさきのすそ濃に見ゆて萩咲にけり
白露の玉かつらして夕庭に人まぢかほの萩か花つま

水邊 萩

きのふかも螢すたきし川隈は花にてるまで萩咲にけり
朝 顔

咲にけりよすかも見ぬちり塚にどのれ生なる朝顔の花

くちはてしまかきの結めそれかから盛過しつ朝顔の花
心して結しまかきのさき竹にそむきてもさく朝かほの花
明はやととりたつ庭の竹の戸にひらきかよれる朝貞の花
露

閑居 露

晝たにも人のわけこぬ蓬生を處にかほにたける露かな
虫

夕されはおのかさまくなく虫もひとつ心に秋やかなしき
れもひくまなくてもなくかきりくすさも覺やすき老の枕
にさよこそは曉露のしけからめつまこほるきのわひつよを
啼あかす見し花の千草をかく虫の聲にうつして野は暮にけり

曉 虫

鐘つきて風もしとまに更る夜をかきりとせぬ虫の聲哉
ひとりぬの老の枕はなく虫のなみたにぬれぬあかつきもなし

深夜虫

更ぬとて友はかへりし跡もなほぬられぬ窓にまつ虫のなく

旅宿虫

見し夢もさむれはもとの草ふしに家路覺ゆるはた織の聲

稻 妻

行あひの有かし雲をねさしにて影もとよめぬ秋の稻つま
朝かほの花まつよひの露の上にさすもはかなき稻妻の影

秋 夕

おほくしく重れる霧か晴てたに秋を忘るよゆふへならぬぞ

それとなきうきにも根さす思ひ草はらへとしける秋の夕暮
草かけの虫の忍ひ音しのふれと心にあまる秋のゆふくれ
さくくりのこほるゝ見てもかなしきは身ひとつならぬ秋の夕暮
すみれさく春たに人のまたれつる山田の庵の秋のゆふくれ

秋 風

大空にしられぬ雨もふるばかり秋かせ立ぬ宮城野のほら

舊都秋風

花見てもあはれ昔としのはれし吉野の宮の秋の夕かせ

田家秋風

をとめらか綿つみはこふ垣つ田に夕くれ寒き秋風そふく

霧

海原のきり吹風にあらはれて帆かすそひゆく沖の友船

箱根路やあけてもくらき朝霧に二子の山はありとしもなし

川霧

尾花川きりの絶間に旅人の袖こそなひけ舟まねくらと

浦霧

沖邊ゆく舟こそ見ゆれ松風に浦の朝霧片なひきして

山家霧

いはまもる水をしるへにかへる哉夕霧ふかき山陰のさと

山路霧

わけわひし山路のさ霧すへ晴てみさりし峰に夕日さすなり

野分

風をいたみ花野は夢となりにけりはかなの秋やひと夜はふりに

鴈

沖津舟追手にきほう朝ほらけ聲をほに上て鴈も來にけり

初鴈

明ほのや桐のひと葉に先たちて鴈かね落す秋の初かせ

桐の葉もたへぬ夕の秋風になひきて落つる初鴈のこゑ

月前鴈

月清み見ゆともなしにさやけきは門田に落る初鴈の聲

八月十三日小林大茂方にて小原千座會月前鴈

なきわたる鴈の羽かせもかつ見えて月をはなるゝ山のはの雲

月清みゆけともはてを中空に思ひわひても鴈ハかくらん

月

昔おもふ老のなみたの村雨にくもらぬ月をやつす夜半哉

山の端をふたゝひ出る面影に雲にはかゝるゝ秋のよの月

ぬられぬもたれ故となく老の身ハたゝ有明の月をまたるゝ
旅ぬしてすまの磯屋に見し秋の月ハ心の海にこそすめ
更にけりはたや今霄も長月の有明の月をひとりかみん
梢こそまた染あへぬ山の端の秋はこよひの月にみゆけり
瓦屋の軒端の露のくたけさへ玉と見る迄照る月夜かな
とりなき程もなきよの空見れば我身もかくそ有明の月
なかむれは見ぬよの人の心まで心はうかふ秋のよの月
夕からす鳴てこゆつる山の端の松より出る月のかげかな
昇りたつ箱根の山の高嶺より海をはなるゝ月を見る哉
はれは晴れくもれは曇る秋の夜の月を心の友かゝみなる
望月のこよひの秋の影かくはわか世にみてる何をかはみむ
待 月

月まてはひとむら名引うす雲も心にかゝる夕くれのそら
うき雲のひまもとめてもゆくもの八月まつよひの心なりけり

曉 月

つかへすとなれてあまたの秋も見き曉起の袖の上のつき
夕 月

夕けたく烟の末にほのめきてまた光なき月のかげかな
入日影やかてかくれん山の端に出て暮まつ月もありけり

池 月

かゝみなす池にうかへる蓮葉のちりさへ見ゆてすめる月哉

野 月

あらと吹野への露原夜ゆけはしのゝ亂るゝ月も有けり

山 月

松か枝をなかは放るゝ影もよし山の端なから月ハふけなん
賞 月

木かくれて音のみ聞し谷水の行へもさやに月ふけにけり
名所月

八重山のみねより出て木曹川の行へをしたふ月のかげ哉
長良川月にうかれて下る哉さしも短き舟路ならぬを
箱根山つからゝ道よつく杖もしはもとゝめて月を見るかな
雨後月

月やとすよハともしらていとひつる眞萩か雨ハ露になりつゝ
社頭月

岩屋戸のあけし昔の面影に神垣てらし月は出にけり
海邊月

月はいま海に出にけりしかま川きらの苦屋もすたれ巻らん
淡路島かよふ小船もかつ見ぬて須磨の上野に月は出にけり
雲間月

よの中よ住うしとともいかゝせん月ものかれぬうき雲の空
水邊月

夕川のうき藻に宿る露までも白玉なしててる月夜哉
山家月

楳の葉の露ちる音も聞はかり山風すみて月ふけにけり
月前旅

月残る小野の芝生の露ふみて朝行道は旅としもなし
月前興

月夜よし夜よしと出て虫きけは花野の秋も最中なりけり

月前言志

身の程をわきても照す月ならばわか世の秋やわひしからまし
千々の秋かはらぬ月に何しかもなむむる人の老はそふらん

月前眺望

しらかしの梢のあらしきよ更て霧の暁に月をすむれる

古戦場月

風をいたみあらそひ落る粟からの山かけ寒と秋のよの月

秋月勝春花

ちり安き花にはうきもそふものどかはらぬ友か秋のよの月

月思往事

思ふ事なかりし秋の昔たにあはれと見てし月にやはあらぬ

八月十四日藤岡氏の會に月前云志

夢ならて千里の外に行ものは月見るよはの心なりけり
八月十五日鶴殿氏の會に月昇山

打わたす峰の松原つはらかに影さへ見ぬて昇る月哉

八月ばかり奥田英光をとひて

虫の音に昔語を聞そへてかたふくまての月さへそ見し

九月十三夜

秋萩は菊にうつりし園生にも盛かはらぬ月の影かな

鹿

人のよの外もかきしき秋ならし夕山かけよどしかなくなり
山里の秋のねさめの手枕は鹿の音ならぬ松風もなし

鹿聲遠

秋もやゝ末野に落る月よりもかなしくほそるさどしかな聲

擣衣

秋ふかみ打やきぬたもきよなれて遠音は耳にひくともなし
賤の女はつよりさせてふ虫の音におとろかされて衣うつらん

海邊擣衣

あゝの屋の灘の潮かせ秋更てまはらにのみもうつ衣哉

菊

千代ふともゆる人なくは何かせん山路の菊はをりて歸らん
つくりけん心の花も八重垣にこもりて深き菊のいろ哉
世の人の染る心のいろくも見ゆるは菊のまがきなりけり
さけはまつまたれこそすれ人のため植しまがきの菊ならなくに
千代かけて菊咲見れば露霜の秋はかなしき折とともをし
植しより心つくしの色々もあらはれて咲菊のはなその

植しより千年も経ぬる心地してまぢしまがきの菊咲にけり

山紅葉

奥ふかき色もしられて朝霧の絶間かやく峰のもみちは
木々はいつみゆきまつとか大君の衣笠山に錦はるらむ

古寺紅葉

紅葉の軒はをてらす山寺は入相かねに暮ぬともをし

野亭秋情

物ふす床をとなりに誰すみて秋の哀をひとりしるらん
あはれなる野守か庵かさまくの花の千草をさむしるにして

水郷秋望

すみ田川すみ繪に似たる朝け哉はし場のわたり霧こもりつゝ
水無瀬川水のうき霧たぬくに山本わたる鴈のひとつら

秋 朝

とひのなく外山の空の朝日影うすれもあへず村雨とふる

秋 雲

みねこゆる夕の鴈のひとつらにれくれて名引空の村雲

秋 雨

野分たつ空かとみしを風さきの行合の雲は雨になりつゝ

秋 田

若苗に螢すたきし垣つ田はみつ穂てるまてはやなりにけり

秋 鳥

村雨のはるゝ末野のかさ松に翅ほすらし鷺のむれるる

閑居秋

ふみわけてとふ人もなき蓬生に處えかほの今朝の露哉

山家秋

山窓はすゝ吹かせに露ちりてさすや夕日の影も寒けし

折にふれてよめる中に

れもふこのあらましろはとなかむれは露にしほるゝ朝顔の花

江戸に在ける秋

めぐりあはむほどは雲井とかかめつゝ妹かまつらん月は出にけり

むさし野の露はみかから故郷のこはきか上にかけぬ日もなし

九月末つかたすゝろありきして

川そひの新はり小田も此秋は水見ぬぬまて穂浪たちけり

暮 秋

鴈をきてしくるゝ山のうき雲にたゝよふ秋の行へをと思ふ

吳竹もひとよふたよと霜をへて長かるましき秋は見ぬけり

秋ふかき程もくまれて朝なくむすふ筒井の水はぬるめり
有明の影も冬めく霜の上に残るとはなき秋のいろかな
苔の上にななくこぼるゝ櫛の實の音もはひなくくるゝ秋哉

山家暮秋

山柿もほとく落し窓の内に残るこのみえさらにさひしき

秋の末に

朝雲のゆきあひのまのひとそゝきやがてしくるゝ初なるらん

冬

初冬

はゝそ原いたり至らぬ秋の色をまつとせしまに冬は來にけり
音さゆる嵐の庭の霜柱たつ冬しるき今朝にもあるかな
かけともの庭の松垣うちしくれもる日淋しき冬は來にけり
秋ハはやきのふか越ぬし手向山けふさへぬさとちる紅葉哉

時雨

出る日に一村さばる朝雲やけふもしくるゝぬさしなるらん
風はやみ雲はとまらぬ山のはの夕日にそゝくむら時雨かな
鳶のなくあしたの日影さしかはりあらぬ空よりふる時雨哉

朝時雨

出る日の影はにほひて朝妻の片山くらくしくれふるなり

夕時雨

入安き日影を、しむ山のはにあやかくかゝるむら時雨かな

深夜時雨

屋みになく森のからすの聲ながら行へ亂れてふる時雨かな
淋しきは萩の枯生のさよ時雨かせにぬさめし秋はものかは

山家時雨

來ぬ人をまつの外山のむら時雨けふる幾度窓はとふらん
ゆくりなくけふる時雨てまつのとにまたぬ里人雨やとりせり

海邊時雨

たもとほる小舟を見れば沖浪のさわくかたより時雨來にけり
をみのほす海士の磯屋の夕日影さすかとすれば打時雨つゝ

行路時雨

山路ゆく袖に木の間の夕日影こぼれて晴る、むら時雨哉

旅中時雨

いそげともこの果ぬ間に箱根山ふたもひ三たひうち時雨つゝ

落葉

は、菅原こすゑまはらになりにけり今ひと時雨まつとせしまに

杜落葉

夕月も杜の下道いつしかとあらはになりてちる木のは哉
神無月いまは葉もりもあらと吹杜のもみちはつちにちりつゝ

風前落葉

そめて後ちるたにあるとまた薄きもみちもまする木枯の庭

霜

月影は霜くもりして岡の邊の松のは白き朝ほらけ哉

竹 霜

村雀日影もとむる聲さびて霜よりしらむ窓の竹村

行路霜

朝またきしもふむ道に跡とめて夜ふかく過し人をこそしれ

橋上霜

しのひつゝたれか夜深く過つらん霜に跡ある朝むつの橋

寒 草

なまめきし秋はきのふの女郎花霜をかさして枯残りつつ

野寒草

をみなへしはれしかけの姫小松はるを待まで野はかりにけり

寒 樹

下草と見ぬし小松はあらはれて冬野の木立もとつはもほし

ひと本の松をあらしのよすかにて林に残るひと葉たはなし

枯 野

鳥網はるどさゝかくまのひと村も目にたつばかり野は枯にけり

小鷹人鳥たちうかかふ野司のくまもなきまてはや枯にけり

十一月はかり布勢の里より吉岡に行ける時

夕日さす浪路をかけて青島の春めく空もさひしかりけり

神無月春をかすむる山かたにまける麥生は淺みとりせり

味むらのたなしつらにも見ゆる哉夕あさりする海士の友舟

たなし頃ある夕暮に

晴てしもまた時雨くるうき雲のひまあたらしき月を見る哉

氷 始 結

落葉にはもる音きゝと谷水のとたぬに今朝の氷をそしる

氷 薄

日影さすかた瀬はとけて朝川のなかはよとめる薄氷かな
田 氷

垣つ田に結ふ氷やとよ年のしるしを見するがみなるらん
野 冬 月

鳥かりすと出てもまれに見つる哉枯野にさゆる有明の月
残 菊

見る人のあらぬ心にまけしとや冬まで菊の老せさるらん
江戸にありける年の霜月はかり

冬の夜もや、竹芝の浦風にぬさめさひしく千鳥なくなり
衾

薄からぬみよの恵みとさゆる夜の衾の下にぬさめてそしる

霰

たくと見し露はきのふの玉笹にたまりもあへすふる霰哉
曉はさらてももろき老らくの夢をくたきてふる霰かな
風に落る榎の實もともに取ませてうかあかひろふ初霰哉
風さそふ一村雲のゆきふりにかた庭わけてふる霰かか
大かたは見るもいふせきちり塚に玉まきちらとふるあられ哉

雪

村鳥の今宵のねくらいかならん夕山松の雪のしたをれ

初 雪

夜もすからちりしもみちのひと村に今朝めつらしき雪を見る哉
時雨こそ幾たひ夢をくたきしか思ひもかけぬ今朝の初ゆき

夜 雪

松の枝にあまりて落る音きけは積るもしるき夜半の白雪
夢さむるどりく窓に音するや竹のははるふよはのしら雪

遠山雪

雨はるゝ野邊より遠の村山はやつとあらはに雪ふりにけり

山家雪

山窓のはれ行雪に見わたせば野中の松もとなりなりけり

行路雪

ふりにけり枝さしかはす岡の邊の竹の下道ゆきなやむまで

水邊雪

とまり鶉のぬくらに残る暗もなし川島松の雪のあけほの

雪埋松

三笠山しつるゝ雪に老松のかけあらはれて朝日さすなり

わか岡のあらゝ松原あらゝさへふり埋めたる今朝の雪哉

稻葉山雪

いなは山宇倍のみむろの神杉にゆふかけ渡す雪のあけほの

雪中眺望

またやみん嵐の山のあらゝ松ゆきの花ちるあけほのゝそら

加露川暮雪

大舟の帆の色きぬて見わたしの高濱しるし雪のゆふ暮

十二月二日朝雪のふりけるに

春待とかけしまかきのわらひ繩結目にたまる今朝の白雪

雪の歌よめる中に

くらね神門にらみしてふらしけんむらく白き今朝の初ゆき
すたれ巻をとめやいつらふる雪に今朝は戸さゝぬ高殿もなし

花さそふ嵐の庭は夢なれや吹雪にかすむ窓のあけほの
千鳥

氣たのさき千鳥しはかく聲さぬて雪吹たろすわしの山かせ
埋火

君かよはふすまかさぬて埋火によるさへ厚きめくみなりけり
炭竈

炭かまの煙も雲にたちそひて雪けもよほすとの山里
早梅

賤の男かとし木を急く山たつの向ひの谷に梅咲にけり
花といふ花も残らぬひと年のはてをばしめにさくはこの花

冬人事
たまほこの行かひしけくなりけり年の長路のすゑ見ぬしより

市人の新わら杵をうる見れば遠山しろくゆきふりにけり

冬朝

なかせの音のみ高き朝け哉出る日影も霜くもりして
さきなく外面の岡のをさき原霜見ぬそめてあけぬこのよは

冬夕

いさらは松の戸さよむふる雪に友よふ鳩の聲も暮にき

冬田

みの笠も時雨にくちし小山田のそはつの袖に木枯そふく

冬鳥

聲しらぬ鳥も軒端よ來なくなり三山の雪やふかく成らん

冬獸

門の犬の夜聲きくにもみかり野の雪ふみ分し昔をを思ふ

冬 池

池中にぞりく鴨のはねきるは静けき夜半に雪やふるらし

閑居冬

木枯のけふも窓うつ音はして垣ぬの落葉ふむ人もなご

冬神 鹿

つかさ人新嘗まつりつかふとかゆふしてかけて神とる見ゆ

年の暮におもふ事ありて

年暮て雪をいたく松をくは誰をわか世の友とかもみん

しめかさりなといふわざすとて

世のことはゆつれる身にもゆつり葉をかざる仕業はすつへくもなし

歳 暮

いつしかとひまゆく駒につみそふる年の重荷はやる方もなし
谷の水軒の板井は氷れるを流るゝ年はよとみたにせず

惜歳暮

ひたふるに春待わひし昔さへ今更としき年の暮かな

市歳暮

市人のゆきまひまなきやちまたにちりもさわきてくるゝ年哉

閑居歳暮

世にたゝぬ門にも年はくれ竹のそひゆく老のふしは見ぬつゝ

追 憶

門とになやろふ夢は行年を雲井のよそに追ふこゝちして

門の犬の夜聲きくにもみかり野の雪ふみ分し昔をと思ふ
冬 池

池中にぞりく鴨のはねきるは静けき夜半に雪やふるらし
閑居冬

木枯のけふも窓うつ音はして垣ねの落葉ふむ人もなご
冬神 鹿

つかさ人新嘗まつりつかふとかゆふしてかけて櫛とる見ゆ
年の暮におもふ事ありて

年暮て雪をいたよく松おくは誰をわか世の友とかもみん
しめかさりなといふわざとして

世のことはゆつれる身にもゆつり葉をひたる仕業はすつへくもなし
歳 暮

いつしかとひまゆく駒につみそふる年の重荷はやる方もなし
谷の水軒の板井は氷れるを流るゝ年はよとみたにせず

借 歳 暮
ひたふるに春待わひし昔さへ今更としき年の暮かな

市 歳 暮
市人のゆきとひまなきやちまたにちりもさわきてくるゝ年哉

閑居 歳 暮
世にたゝぬ門にも年はくれ竹のそひゆく老のふしは見ぬつゝ

追 健
門とになやるふ夢は行年と雲井のよそに追ふこゝちして

戀

戀

ひと夜たに青のしたねのぬもみすてみつと難波の名よは立けん
かくとたにぬやは岩根のこもり水むせひてのみもとしをふるかな
和田の原風をたよりにこく舟もれもふ渚によらてはてめや
とよきも思へはつらしつれなくてあらはさてともたのみよらしを

待 戀

さりともと思ふたのみはいつはりになれてもこりぬ夕暮の空
うたかへはそれさへつらしく々となく軒はの鳩の夕くれの聲
まぢわひぬあたに今霄も空ふけて契らぬ月をねやにとひくる

別 戀

別路に思ひかへせはつらかりしきのふも人のなきけなりけり

移り香もとまらぬ今朝のきぬくになと面影は身にまとふらん
別路に思ふもかなし朝月夜うすくやならん行末のそら

春 戀

春の野の雪の下草しはしこそわか下もぬもしられさりしか
なつかしきそのひと聲を鶯にたくへてきかん夕くれもかな
朝なく聲のみ聞てうくひすのけちかくなれぬ戀もする哉

夏 戀

人こゝろうかひか手細むすほれて心もとけぬ夜頃へにけり
郭公まつをかことにぬやのとのいたつらふしも幾夜経ぬらん
人心うかひかかよりよひくにもゆる思ひのしたむせひつゝ
いつまぢてやまん思ひそ夏虫もゆる夜頃は限りこそあれ

變 戀

あぢさゐのうつろひ安きはな心思ひはからてたのみけるかな
顯戀

うらとひに夕の煙なめしや名さへ世にたつはしめ成けん

聞戀

ますかゝみうつしつておる人言にきゝし姿をいつあわせみん

馴戀

なれぬれはありのすさひにまち戀むその夕暮も悔しかりけり

夢逢戀

名残なく見つる夢こそ悔しけれ別れをしらてさめまし物を

忍絶戀

人しれぬわか中垣の片くつれよそめはかりを何かこひけん

寄木戀

つれをこやいつはの松のいつはともたのめぬ中に年を重ねて
かくてしもあはれありそのそなれ松まつになれても年をふる哉

寄海戀

わか戀はなるともしらぬうつしほの引のまにく身をしつむらん
よる舟も今は渚にくち残るみをつくこそわかたくひおれ

寄魚戀

人こゝろうき藻の下にふす魚のいつかあふ瀬にめぐり出まし

寄貝戀

わか中の戀やむなしきうつせ貝あふことをみにゆられのみして

寄月戀

いたつらになかめあかしくわか袖を今朝も別るゝ月はありけり

寄石戀

底ふかくこのひしものを沖の石いつの沙干に人はみつらん

寄草戀

ゆふされは野末の草の露を重み亂れふせともとふ人そなき

寄虫戀

わか中のこゝへともなれ七わたの玉すらとほす虫はありてふ

寄霞戀

たまあへはあひみんものを霞ふる夜半さへかゝるまるねのみして

寄雪戀

ふりにける宿の中道あとたぬてゆきかよひしは昔かりけり

寄篁戀

東路の八幡の藪にいる人のあふことまれになれる君哉

寄鳥戀

まちこひて幾夜なかなくとりの音を空しき床に聞あかすらん

寄紅葉戀

秋過しわかみ山木の下もみちこゝるとたにも誰かしるへき

寄烟草戀

人しれぬ思ひにむせふけふり草ひとりくゆるも時にこそよれ

立無名戀

流れてのあふ瀬まつまに千とせ川早くわろ名は波と立にき

口かたむ

耳敏川みゝとき世なりむすふ手の槩の末も露なもらしそ

戀の歌の中に

門たゝく人もあらはと思ふ夜のねやの背面にくひな鳴なり

雑

天象

明たては何を隈にたくまもかきみ空に星の影かくるらん
天の原思へはあやし雲霧のかくるくまやいつこ成らん
雲

夕雲はいつことまりと靡くらんわか山からず歸り來にけり
雨

降る音にまかひし軒の松風は吹たぬてこそ雨になりぬれ
曉雨

はらくと妻戸にかよるさし梅の曉雨をものほかなき
草庵雨

草の戸の夜半の小雨となりけりこの暮やみの鳩のした鳴

晝

いとねすて世わたる人はさもあらはあれ晝もしめらに夢やみてまし

四海清

紐たにもとかぬ袋の梓弓やしまの外も浪たゝぬ世は
あまの子もこゝろくの幸はいつ島のさきく浪たゝぬ世は

煙

朝夕のけふりも民の心とやゆたかなる世に立なひくらん

暮村煙

三日月は煙の末にはのめきて松かせくるゝ岡のへのさと

山

色かへぬ雪の高嶺もあるものを山はみとりと何れもひけん
昇りたちかへり見すれば箱根山雲の上ふむ道は有けり

富士

心あての松はふもどに暮にけり山路の果や雲井なるらん

瀧

ふしの根をけふきて見れば有とのみ聞て過にし世こそをしけれ
きのふこそ松の木の間に見そめしか空にもあまる富士の高山
日にちたひすかたは雲にかはれともあかぬはなしふしの高山

但馬國猿尾の瀧を見て

さかむらの猿尾の瀧のむら糸は結ふかたより解てこそゆけ

因幡國雨瀧を見て

あわ雪をくぬばらゝかし神をなる雨の名にふる瀧もとゝろに
くらお神五百都石村とよもしてふらすひ雨は瀧にこそ見れ

池水浪静

さやきなきみよの姿やうつるらん鏡の池はたつ浪もなし
海路

みかしほの室のうら風早からし片帆になりぬ沖の友ふぬ
雨後眺望

村雨は暁に残る松か枝に驚ふたつめて翅ほすなり
市

朝なく立の市人けにや世のなりはひはかりくるしきはなし
古戦場

矢さけひの昔にもへは秋かせの聲さへかなし篠原の里
久松山懐古

大かたは粟生となりて崩残る城戸のあら垣もる人もなし

跡もなき城上の道を分來れば薄れらなみ秋かせそふく
閑居

世にたゝぬ老の住處にふさはしく門の板はし苔むしにけり
閑居五十首の中に春

けふもまた窓のなかめのつれくに落る椿をかそへてそ見し
くるとあくどひとり起ふすかくれ家の軒の柳は風をこそまて
中くに園生の竹の世に背く宿を屋とよやなるよりくひす
花さかん世をしもしらぬかくれ家にひとり春する庭櫻かな

山家

暮ぬめり松のこほればかきつめていさや夕けの煙たてまし
身こそあれしけきか中のふせ庵もたつる煙は世にしられつゝ
山陰の柴のあら垣あらましにたかひし果のすみかかりけり

山家煙

かへり見る杉生の奥の浮雲や出しわか家の煙なるらん
山家松

貧家

わかひけは妹かかたあく小衾のうらせはきよを侘つゝやぬん
三月十六日榎本寛東京に出立別れに

とく行てとく見て來ませ春は今み世も盛の花の都を
三月晦日大野幸英京に物學ひに出立別れに

明日よりは淋しき窓に行かへり螢も君か影やこふらん
四月はかり谷口梅宇旅立ける別れに

行水の早くをかへれすみ田川すめはうきせもある世なりけり

砂川氏高山縣のつかさになりて出立別れに

位山あるてふ國は君か世にあふ坂こゝにて行とこそきけ
鵜殿氏旅立の別れに

八束杖つきしたかひて此たひはみあと追はんと思ひし物を
我が子武か戦争に出立別れに

めつらしき世にあふ坂の關こゝにて名をば雲井にとめよとを思ふ
武士のこゝろ鋒とも刀とも研てつらぬけまかるなよゆめ
君かため重き御楯とならん身を思ひかるめてあやまちなせそ
孫の節か物學ひに京に出たつ別れに八月かり

故郷の露なわすれを菊の花にほふ山路に入らはいるとも
伯耆國今津の里松波氏に遊ひて立出る時の別れに

わすれめや君かなさけの厚ふすま夜さへかさねてふしよかりしを

旅

家にてはよそにのみ見し白雲をわけしもいつの山路なりけん
松の火のこほれし道に箱根山夜こほの人の跡をみるかな
夢さむる淀の小船の苦をあらみひまこそしらめ夜や明ぬらし
故郷にかよふ夢路の程はかりうきことしらぬ旅ぬなりけり
濱松のあらしの下に聞ゆかり沖の舟人まかちとるこゑ
旅そうきたひそ嬉しき折にあへは花の下ふし雪の山ふみ
家にぬし心安さをさし櫛のあかつき毎にしのお旅うな
旅といへは物そかなしきしかりとて草を結びてふすよならねと
箱根山せきの松村すき來れはれくれし友のよふ聲をすする
宇和津川かは風涼し三日月の里のこなたに秋や立らん
月残るをのゝ芝生の露ふみて朝ゆく道は旅としもなご

夏 旅

風まちて月みかてらの夕ありき夏を忘るゝ旅も有けり
水無月の照る日にぬれし旅衣ほすや岡邊の松の下かせ
人もしか晝の暑さをいとふらしともなひこゆるさよの中山

秋 旅

山陰は夕霧ふかし衣打たとをしるへに宿やとはまし

冬 旅

けふもまた山路に野路にいくそたひ別れてはあふ時雨なるらん

夕 旅

宿るへき里もまどほの三山路よ心いそかすゆふくれのかね
ゆきくれて宿りもあへぬ袖の上に露をたつぬる月はとひけり

旅 中川

家人にいつか語らんあふみ路や屋すとはいへと遠きわたりを

旅中夢

こよるきの磯うつ浪を枕にて箱根の關は夢もとほさす
千里ゆく夢のたゝちのほとはかりうきとしらぬ旅ねなりけり

舞坂をとほりけるとき

明ぬるかあまのいさり火影きぬて沖津しほ瀬に波をほのめく
三月晦日岩井郡にもものしける時羽尾の里わたりにて

あまの子もめかり汐くむひまならし袖にかけたる藤浪の花
浪の音にとすれは聲もまされけり聞わけかたき蟹のさへすり

明石より舟にのりて

夕庭にうかふ小舟とむれてとふかめめの數どいつれおほけん

粟津にて

粟津野の松の下芝をりゑきて仮寝やせまゝ清きなきさに

旅の歌の中に

隅田川かすみ流るゝ朝風に淺草寺のかねそたゝよふ
曉のやみにわけこし山陰の道もさやかに夜はあけにけり

東路より歸りけるとき

かへり見る雲井の遠にあらはれて名残身にしむ富士の白雪
四月はかり吉原の驛に二夜やとりて

富士川をわたりけるとき

漕出てたゝよふ程は浪の上は身を捨たる心地こそすれ
殿の御供にて勝見の里に侍りける頃

末くるゝ田中の森の夕風に數あらはれて鷺を飛かふ

夕霧に磯山まつは蔭くれてたぬく見ゆる沖つしら浪
吉岡の里に湯あみにもものしけるとき

今ハはや一木二木をなこりにて軒たちならふ松原の里
里の子の落葉かきつむ小はやしの松をそかひに雉子鳴なり
里人の石きり落す山そはにおとろく雉子のほろくとそなく
れなし折三山口といふ所にて

鶯のこゝらなくなる三山口奥ありけなる花を見そめし

十月二日吉岡にもものしけるに飯田俊子も算庸修かもとに行居けれ

は日々出逢てよめる歌の中に

思ふとちかたろふけふは秋の日を夜には繼ともあかれさりけり
れなし折七日の夜より雨風はけしく故郷の家には水や溢らんと思
ひやる胸いたし

うまこらは水こす池をうれしみてさゝ舟流し遊ふらんはや

勝見の里井筒やに宿りける夜

旅といへは短き夜さへねられぬを歸りたくれし鴈もかくなり

伯耆國に遊ひけるとき折にふれてよめる中よ

秋津とふちふの露原かせたけてさすかけ寒き夕附日哉
夕つく日かけろふ庭の石たゝみぬるゝを見れば秋たけにけり
家にもふ秋のあはれを打そへてきぬたにくたくわか心かな
濱松のみとりの上にかゝりけり大神山のみねのはつゆき
打わたす山田の麥生めもはるに日影かすみて淺みとりせり
時雨ふるこの日野川の八十隈をてらすは谷のみちなりけり
風の音は時雨にまかふ葉かけよりこほるゝ雨は木のみなりけり
神山は神さひませと夜の程に雪のうは衣風やさゝけし

大神山にまうてける道にて

あうらつく小石ましりのひちりこにきのふの雨の名残をと思ふ
法美郡姫路の里なる崩御が平といへる古跡を見ありきて

於くつきを埋むる土と成よけんはろふ人なき山の落葉は
七月十日岩井郡馬場村小林摩須美が招きよよりて秋山某迎に來け
れば伴行午前十時頃家を出て午後五時着湯村陸止村山中滋丸
院内村中村某延興寺村宮崎金治八東郡那家村竹尾壽美藏等待迎へ
居たり翌日より祝詞の書を講す同十二日蒲生村銅山見物に行各同
伴山添貞造同人弟某待迎へてもてなしす歸路山添が宅に立寄り夜
に入歸る同十三日恩志村社祭に付小林忠一迎ひに來り同伴止宿致
し高山村本光寺を訪ふ十四日午後三時頃馬場村に歸る其ほとよめ
る中に

朝なくそよく清水のきよかれとねがふ心は神もうけなん
十月はかり岩井郡牧谷村河瀬總方にものちけるときほち坂といふ
所にて

山かけに落葉かく子が袂までこそめになししてちるもみち哉
たなし折河瀬方に宿り居てよめる中に

見る目たにあやうきものを蟹の子は浪をふみても島あざりする
白鳥の羽尾の崎の朝ほらけ雪と浪との色そわかるゝ
見渡せば常たに清き長濱の雪よりつゝく沖つしら浪
きのふがも紅葉見にし山蔭の里わもわかす雪降にけり
十一月末つきた奥谷なる御墓に詣てける折

今よりはみ山にたてる松ならて千代の岩室たれか守らん
たなし折よめる中に

降雪のやさか積れる此頃はわかすむ里も三山なりけり
見わたせとわか跡ならて道もなし絶たる野への雪の中道

但馬國にもものして岸田の里山村氏に宿りける時日とに雨ふりけれ

は

かけふかきこの山むらの雨つゝみ立出入空もなき心ちして
れなし拆山村氏の老刀自八十はかりなるか自らの手わざなりとて
こかひせし糸のまわたなといふ物を送られけるに

老人の手引のわたのなこやかに我も千年を身にや重ねん
明治六年の春伯耆國勝田社の神司を任りて彼處に在け
るか八月の頃よりわらはやみにて震ひ惱みけるにいと
心細く覺ぬて

常ならぬ風にふらぬて音きけは草木みなからかなとかりけり

さのみわか百年まこと思はねとあれはある世を猶ねかふ哉
今は世に思ひ亂れ辭しら雲の消ぬんきぬしは神に任せて

かくてつきく重く煩らひけるまゝに直行武貳人の子等來りて醫
師をも心に任せす萬にさはりあれば家に歸れとすゝめければ九
月廿日彼處を立出んとふし處より乗物に乗りけるとき

かゝるときなくはいかよと思ふにもかは嬉しきは我子かりけり
その歸る由良宿にて

白浪の由良の磯回の旅枕にもひしつめてねんよしもなし
浪路ゆく舟ならかくに浦の名のゆるるゝものは我身なりけり

九月廿四日家に歸りつきぬかくて病はやうく薄らきたれと猶十
二月半の頃までふしとに在けるほどよめる中に

我子らかいさなふ道にひかれすは家にも世にも歸らざらまし

長月のなか夜の枕まきかへしこなたかなたにきくきぬた哉
消やらて猶世の中に有明のつきせす残る命なるらん
枯はてん千草の秋を身のよそにことしはみんと思はさりしを
立歸りふたゝひ見んと思ひきやこのよながらの秋のよの月
倉吉に在ける宣行がもとに

逢見まくたもふ心に立かへる春としきけは先そうれしき
飯田俊子のもとを訪ひて

君も我もともに在經て相老に千代まつ風の音つればせん
武が奥羽の戦争に在ける頃事にふれてよめる中に

別れては一日二日もたゝぬ間に年をへたてし心地こそすれ
君がためまと思ふものゝふの心まもらぬ神やあるへき
ふして思ひ起てかたるも此頃は都いかにの外なかりけり

長閑には思ふ日もなき世の中よ春をわすれぬ鶯の聲
おほかたの心もとけぬ春の日にひとりひ行青柳の糸
いたつらに過る月日かみちのくや軍のはてをいつかきまじ
またさりと雲井の鴈は音つれて我思ふ子のたよりたになき
千々に思ふ親の心は打向かふ軍の野邊の露にたよしれ
君がためかはねは野へにさらすとも終の名のみはくたさすもかな
うちむかふ軍の庭に相そふる親の心よまもりともなれ
みちのくやいはてしのふはきのふけふ我子を思ふ名にこそ有けれ
み軍のとやいかにとみちのくのこのふにたぬわか思ひかな
雪ふみて出しやいつの春霞夏もへたてつしら川のせき
まちつけてたまさかに見る鳥の跡をわが手底の玉にのみして
ねなし折たより久しく聞はさりけるに

あけくれに出る月日をかかめても猶こそしのへ東路の空
敵人はさこそ名こそその關ならめたよりとさへよなと止むらん
聞もいかよきかぬもつらし武藏鎧さすかにまたぬたよりならねは

下野國宇津の宮あたりの戦に我子の存命せりと告越しける時

なからへて有と聞たにうつ宮うつともなく夢心ちして

武か戦争よりかへりけるに

歸りこしけふさへ夢とたとるかなやみのうつゝに一年をへて

七月十七日殿の歸らせ玉ふに

見まほしき君か八千代にとりそへて老の命もおしきけふ哉

北の御方霜月ばかり江戸より歸らせ玉ふこととしのひ奉りて

さらぬたに岩根こよしき箱根山とぬます其日雪をふりそね
霰ふり遠つあふみの荒磯のあらき濱かせ吹たつなゆめ

松

春秋の花にもみちにしをりする山路の松をかれて久しき
句岳になよめにたてるひとつ松やとすあらしも見る心地して
行き來き旅の手向にぬさまつる松ハ幾その人がしるらん
三穂の浦や松原こしの海見れば木の間をわたる蟹の釣舟
朝日に若松の繪に

竹

いつはあれと今朝の初日に若松の千代の二葉を見るそめてたき
雨にふし風になひきて下をれぬ竹のこよろのつよくも有哉
春秋のをりふし移る色もなき竹こそ世にはあかれさりけり

蒼苔満山館

世にかよふ心も今は絶ぬらし庵のふみ石こけむしにけり

鶏

曉としらするとりの羽ふきより心のちりの世にはたつらむ
うらみつるきのふは夢か今はたゝとりかねまたぬ曉をさき

雀

箱根山あけやしぬらし夜こもりの竹の下道すゝめ啼なり
うきふしのある世としらてとなみはるそのゝ雀生による雀哉
うはらに雀ある方

馬

うるはしき花と見ぬても心せよ下に針もつ世にこそ有けれ
鞭とらはうまやにぬふる鶴班もなとか雲井にかけらさるへき
壯夫もなみに越ぬたる駒なくはうちの川瀬に名をしたらてめや
雲井にも飛ん力を得てとあらはこれや世にたつかひの黒駒

駒の繪に

いつまてかつながれてのみ膝をらん野邊を心の駒も有世を

鯉

昇るへき瀧をこゝろのこひすらもうき藻かくれに時やまつらん

鯉の繪に

月清み川藻の下にふす魚もひそみかねてやをとりにつらん

海老の繪に

海くぬかすめる所はへたつれと老の名にたふ友をゆかしき
猿猴の空に手をはしたる繪に

虎の繪に

さかしらに何の人まねふみもみす月のかつらを拆らんとはする
敵みてはひかぬ皇國の壯夫にこゝろをとりぬ獸やこれ

鼠の皮もてつくれる印袋をあたひにかふるよし聞て

火ねすみのやけぬ皮さへ朝夕のけふりのしろとなるや世の中

硯より龍の昇るかたよ

年をへてすみと硯のみつからもかくのほりたつ身とはしりきや

磯に釣するかた

ひと筋にのかれて遊ぶ釣人はこゝろの針を世にまけしとや

狐の嫁入といふ繪に

今こんとまては誰か宿晝かほの花妻きほふ夕たちのあめ

ある川邊にて

そみとりのうかゝふ下にふす魚は淵もさなからうきせならまし

蛤の變身龍になりて昇れるよししるせしものを見て

雲井まて昇りたつみとなれるこそ年月つみしかひはありけれ

山水の繪に

あけくれに軒端をかよふ雲ならてわかすむ庵はとふ人もなし
わか庵は棚もかよはぬ奥なれば斧のひゝきを麓にそきく

布袋の繪に

ぬるまたにはなたぬ君か袋には玉にもかへぬものやつゝめる

栗の繪に

うちゑみて下に針もつ今の世の人にはまざるこのみなりけり

色付たる木實あるかた

小鳥なく岡への里の朝日影春めくまてに秋九けにけり

天王祭りの繪に

行かひのむけき大路の八ちまたにちりも立まふ夏祭り哉

七夕祭りの繪に

竹の葉にたぐ露見ぬてなひきあふ星のひと夜もやゝ更にけり

風船の繪に

天雲の上ゆく舟かひと筋にこゝろの糸を綱手にはして

小林直風か耕作の繪に歌をと乞へるよ

いつしかと五百代小田になひくへき露の玉苗生をめぐり
淋しさはいつこにかこつ秋ならん豊けき年の小田のゆふ暮
上の御方に奉りける繪にそへてよめる

千代川春

後たろす千代の川瀬のみなれ棹見なれても猶あかぬ春哉

倉田秋

松かせのたぬくはこふ夕霧に倉田の森は見えかくれして

稻葉山秋

いなば山穂をみかたよる麓田に馬かねなひき秋風そふく

霞湖照月

かへり見る霞の里はくれ初て月にうつろふ高住のを加
車の歌に立春をと乞へるに

いとはやもめくる車の行かひに賑はふみよの春は來にけり

三月廿六日宮原積に遣しける文のはしよ

今ははや見る夢ならてまれにたよ昔をうたる友さへそなき
古蔭がせうそこしけるかへり云のついでに

ちとりなくよ半の汐がせふくはらの里わのね覺思ひこそやれ

東京なる舊藩主の御前に出づける歌

東路や見し世は遠き富士の嶺も更に戀しき春の明ほの
言の葉の種となりても千年經しいなばの山の松そ久しき

皇典考究所にて學生ともに

敷しまの倭にしきの花むしろふみみん春は今にやはあらぬ

西行上人の像を黒川樹平のもとより我に譲られければ二月十六日

忌祭に當座會しけるとき

契あれはいふせきとやのしきやにも君に宿かすとの嬉しさ

西京なる森本後洞に孫の節かことたのみ遣すとて

かけたのむ森の下草ひたふるに露の恵みのかよれと思ふ

新曆一月十四日舊曆正月元日になりければ

めぐり來る月日はたかし一とせを二つにわけて祝ふ春哉

朝寢する人をいさむる歌をよみてと需られけるに

鶯の聲きくことに思へ人朝寢いさめし親のめぐみと

としむへき人の一世のあたり日を夜に繼てさへ眠るへしやは

知事山田信道の轉任を

いなば山みね立わかれゆく鶴もなれしふもとの松な忘れそ

うまこの生れける節太郎と名付けて

千代かへぬみさをにならへ竹の子の人にかゝたるふしはなくとも

齒を痛みてぬかせたるにとみに心よかりければ

なかくに残る古葉をばらひてそ老木も春にあふ心ちする

鵜殿氏東京麻布新網町に居をしめられけるに其處は初音の里とい

ふよし聞て

ほともなく君かきくらん鶯の初音の里は名さへかつかし

石ふみのうた

ふみまとふ人あらせしの石ふみは道あるみ世のしるとなりけり

あはり安きもの

うき人の心の花はあちさるの色よりはやくうつりのみして
弓

くたちゆく身の老らくはしらま弓もとの心にひかれのみして

劔

人こゝろれもてよそひの飾太刀まはゆく見ぬてまことかのみや

癡 刀

ぬる間たに忘れしとせし劔太刀身をはなつよは夢かと思ふ

烟 管

ものうさの思ひもちはし消ゆくはくゆらす管の煙なりけり

石

なかくに朽せぬのみか石とさへなれるを楠のふしきなりける

目 鏡

かけみればやみぞもてらす目鏡の玉こそ老の寶なりけれ
船

帆手うちて行と見じまに風早の三穂の浦舟浪に消ぬる

川 船

さしのほる秋の夜舟のかから川とまゆる月に梶まくらして

高

山かつとありける身さへ雲の上の星の位にまじるみよ哉

低

背くままりひける車か龍の馬に乗てきほひし武士にして

近

海原の千里の遠の音つれも時の間にきく道は有けり

赤

紅のこそめきならずとめ子かふくほつきの色もうきはし
柿の實の色つく里を麓よてもみち奥ある山つゝきかな
白

浪よする磯のはなれ洲雪はれて飛立鷺の行へ面白
青

しみたてる青垣山の空はれてちりはかりなる白雲もなし
夏山のみとりを移す麓田にけふは早苗も植はてにけり
白と青

和田の原潮かせ荒く成ぬらしみとりを隠す八重の白浪
黒と赤

屋みをまつうかひか友の業はひも照すかゝりの影頼むかり
白と黒

打わたす朝の原は雪はれて數もあらはに飛かからず哉
數を題にてよめる中に

二

二神の右に左にめぐらしゝ道をどゝへのはしめかりける

六

時守か打やつゝみに三つふたつ聲をあはする明からず哉

八

ものゝふの八つのかはねのけちめさへ亂れて今はこる人もなし
道

道ひろく榮行國となりにけりぬそか千島の奥もひらけて
名所道

富士の嶺やいゆきはゝかる白雲の上ふむ道もあれは有けり

詠史

天の下にはひし袖を子にすらも重ねかねたる夜半のみなしき
行鷹のみたしゝ列をもものゝふの道のしどりとなしゝ君かな

神功皇后

玉くしけ二つの石をいはひてそみつのから國しつめましけん

鎌倉右大臣

ひたふるに池を頼みのはなち鳥雲に羽うたん物とやはみし

北畠准后

君なくは都も野邊と荒しよに誰つみわけん百草の花

經信郷

大井川なみくならはみつの舟ひとつにたにも乗ぬましやは

小楠公

ちる花のいつれはあれと三吉野のひと本櫻をしくやはあらぬ

名和公

家をさへ煙となして雲の上にたてしいさをは消る世もなと

毛利元就

いつく島あら潮わけてよせさらはなみにこねたる跡はとめゝや

夕顔

はぐくれをたのみ置つる露のみに何を日影のよひそめけん

藤壺

玉たれの内ももみちのちるはかり立まふ袖をいかにみつらん

夕霧

ゆくりかくほのみし花の朝貞に野分のそらもなつかしき哉

漢高祖

龍の背をふみ渡りしや末終に雲井に昇るはしにハありけん

孔明

奥深き心見ぬしとこしは垣しはしは庵やいてめてにせし
あざり

我とわかつことかたき葛かつらこなたかなたにはひめくりつゝ

聾

花に陀にきくてふ種はあるものを耳な草こそかひなかりけれ

もちつき

ひなひたるすかたはちすもかけ行や都に出しもちつきのこま

夢

時の間に千里ゆきかふ夢はかり世にはかななるものハ有けり

述懐

身のよそにいつまで見てかぞしむへき入かた近き山のはの月
うきよりもうれしき毎になげく哉猶たらちねの世にしまさはと
世の中は秋風寒しかしのみのひとりつくさん山陰にして
れのれ生のあら野の草の花にたに其色々の品はあるよか
かるき身も重き恵みにむくふへき君がみ楯の數にやはあらぬ
髪こそあれ身は老ぬとも武士の衣をすみに染んものかは
ことしあらは君にかへんと思ふ身の老ぬるはかりかなしきはなし
いつまでか道のちまたに立ちりのかよりかくより世になひかまし
吹としもしられぬ風にたつちりのさわき安きは心なりけり
杖とりていさはと人のすゝむるもうれしき身とはいつかりにけん
かれ飯は推のはにもる物としもしらて旅行君かみよかな
位山昇らん道もしらぬ身は人の跡たにふみかてにして

何事をいつまつとてか老か身に花の春ともしらてすくらん
世にあわぬをけきこる身はさもあらはあれ花たによそに過ぎよらまし
五百年の後もくちせぬ石の上に我と残さん名こそをしけれ
浮しすむ世の中川のさゝれ石それも巖とならぬものかは
きのふかものひよとなてら子らかたけ見上る迄に我老にけり
何か世をかたきものどてわひをらん槩のうかつ石も有けり
ぬかふことかなへは又もぬさしきて思ひつきせぬ身たこそ有けれ
花さかぬ我み山木も老木とてありとはさすか世にしられつゝ
まさきつらつらく見れば位山のほるよすかは綱手なりけり
さゆる夜は老の命のくしのかみ此みきなくはいかてあかさ
汲いるうつはのまゝになら水のこゝろそ人のかゝみなりける
巢こもりて有へきものを鶯のうきよに出てなくや何なり

壯夫はこゝろ研へし焼太刀のときとにふきのさかばありとも
れもふむぬあるときよめる中に

淀川の舟からなくに人の世の昇りくたりの早くもある哉
またさらに老の命をしむ哉なりゆかん世の見まくほしさに
昔たに稀なりときく老人の數にいらまて身はふりにけり
忘れかんしのふも今はかひなきを夢にな見ぬそ世々の面影
櫻田の雪をちとほに染しより花の盛の世はくたちけり
何くれと世の中さわかしかりける頃大原氏

勅使として關東に下り給ふることのりを拜みて

雲の上に神の音すなりたほしき世のさみたれは今をばれまし
慶應四年正月七日京都より御使ありて全三日より伏見の戦などの
沙汰ありけるに

思ひきや錦のみはたたちまちにひるかへる世をかくも見んとは
時世のちまよ

下野の二荒のみやまふたゝひはうこらしものと思ひけるよと
石の上ふるきにかへるみよならは道あたらしくつくらすも哉

西國のみたれを聞て

華人のせとのあた浪うつといひよすると聞もさわかしの世界
あるねごめに

かくばかり我よふけすは人しらぬ有明の月を起て見ましや
つかへせし其世は夢とかりにをねごめたかへぬ鳥の聲哉

ある夜のとかに月の霞たるに古城のほとり見めぐりて

時守のすみしあたりは野となりて今は狸をつゝみうつなる
片そはに立る古木のひとつ松なれのみ老のしる人にして

飯田俊子に年へて逢けるに

花かつら今もとれもひし君か髪雪と見る迄いつふりにけん
致仕の表奉りける時よめる中に

今ハはや山の下柴をりぞぬて身をかくすへき庵もとめてん
朝なくけつればはれつる白髪の花くれがちにもなれる我身か
六十五になりける年

百とせの半とみしも十年あまりいつか昔の秋のよの月
東京にて舊藩主の若君かくれさせ玉へるに

すみ田川洲崎のちとりもる聲にはきこひなし君か八千代と
驚見安敷ぬし身まかれるに

かへりこぬ君をしのへは呼子鳥よそに鳴をへおしかりけり
飯田年平身まかりぬと告ごしけるとき

梅のみのはかなく落しさみ九れに薫し花の名残をと思ふ
十月十六日夜より兄君俄にやまひして十七日曉うせ玉ひけるに其
頃思ひつゞけける中に

來まさはとかみしまち酒かひもなくひとりくみては袖しほりつゝ
大谷英庸が身まかりけるに

かりそめの筆のすさひも今ハはや長きかたみと成にける哉
れなし折墓に詣て

終の世のすみかと今はなしぬるかきのふはいさといひし枯野を
はゞきや翁のうせけるに

あすこんといひしはかりをかたみにて長き別れと成にけるなか
大田垣知足かうせける後古市の庵ごとひて

まつ人も今はあらしの宿なからとハはむかしにあふ心ちして

橋本秀峰翁のうせぬと告越しけるに

きやはやとけふ迄何にまちつらん空しき風のたよりなりしを
大野竹窓のうせけるに

をなし世にありての旅の空にたに別るゝ道はくるゝかりしを
黒川氏のやしなひ子のうせけるに

草木こそさもあらはあれ若竹のかるゝは何そ秋の初風
中山山中身まかりて後十一月十六日墓詣して菊の花を手向として

手向にとぞる袖ぬらす菊の露千代はきのふの花の香にして
竹内八百吉下野國宇都の宮の戦争に討死しける旨告越げるとき

君かため飛火にきぬし武士の名は萬世も玉とこそてれ
僧眞洞都にてつみかはれける旨を聞て

思ふことつらぬきあへす玉の緒のたぬしやいかに悔しかりけん

懷 舊

今はたゞ起てもねてもしのふ哉夢とかりにし世々の昔を
春懷舊

花見れはいよくかなし去年まてはいきとさそひし友も有らば
故殿の三回御忌に春懷舊

花見てもありし盛のみ世をのみ面影にしてなげく春かな
たほかたに霞むと見しは昔にて心にくもる春の夜のつき

故殿の十七回御忌に夏懷舊

霄なから入ぬる夏の月ゆへに心のやみのはるゝ夜もか
故殿の御祥忌に秋懷舊

秋ことにかけてそ仰く見し月の雲かくれにし夜半の名残を
月清き夜半ともいはすふる雨は昔をしのふなみたなりけり

寄時雨懷舊

れとろかす夜半の時雨のはやくのみ過し昔は夢かと思ふ
十月十七日兄君の一周忌に

うきよりも嬉しきとあることに君しまさはといはぬ日そなき
武か一周忌に

聲を九にきかまじかはとしのふ夜にまたぬ鴈こそ鳴てきけけれ
十一月三十日前島翁か一周忌にあたるに其ころよめる中に

僧眞洞か一周忌に養壽院にて

長き夜のまる寝の袖を右になし左になしてあかし侘つゝ
何にかく世をいそきけん櫻花ちりてかひある時からなくは
妻の忌日によめる中に

ものことのうれしと思ふ折ふしに君しあらはとかなしまれつゝ

恨めしといひしはかりの名残たにうつゝに見ぬは嬉しからまし
今も世になにはのここのよとあしをとふ妻あらはふしよからまし
誰にいひ誰にかたらんよしもなしひとり心にしのふむかしは
吾ばかりかくなからへてなよ竹のみしかりける世をなげく哉

榎本清蔭の五年周祭に

みわすゑていき君またんさしくみに汲し昔の世はへたつとも
ある人の七回忌に

父の十三年の忌に

手向にと折てぎくくる白菊の千代はわすれぬ名にこそ有けれ
母の五十年の忌に

今ハはやひとり昔をなげく哉とへとかたれとする人もなし

鵜殿氏高祖長直君の二百五十年忌に

年をへし人の跡とふかなしきもうれしきみ世にあへはかりけり
志野宗信四百年祭の茶會に

しのすゝきしのへはなひく面影はしらぬ昔にあふ心ちして
池田勝入公の御詳忌に四月より

孝明天皇御神忌に

天しらす神のみたまはうつしよのうつるをいかにもそなはすらん
十一月十二日戦死の人々招魂の祭ありけるに

寄弓祝

神はにかゝれるだまもゆらくらしならしのつゝみ聲いさむなり
君かためむかふかり場の鳥からて弓ひくあたもなき世なりけり

片岡氏八十の賀に

よのうきはよそ路くに過しきて百よろこびも君を見るべき

太田垣氏八十の賀に

千代川の八十瀬のさゝれ巖とも寄りあふん世こそ君はしるらめ
たのか八十の賀に宜行か人々に歌乞ふとて題を出せとすゝめけれ
は梅多春友といふことを出して我も

幾世へて心かわらす咲かざる梅にはまさる友をかかりけり
誰ハあれと老の枕にうとからぬね覺の友や窓の梅かゝ
千代をまつ宿にはうゑん梅の花いくその春も老かくすため
舊藩主より己か八十の賀を壽て給はりけるに

み空よりふりくるけふの玉あられ玉とかさして袖につゝま
御分家の君よりも同じく給りけるに

ゆくりなく窓に落来てうれしきは雲井の空の芦鶴の聲
相摸力士荒岩の七十の賀に

世にこぬし力はおねてしられしをよはひも人にまさる君哉
ある人の六十一の賀に

此春は野への若菜のみとり子にをちかへりても千代はつまなん
黒川氏六十一の賀に

末遠き年のをた巻くりかへし君か經ん世ハはてなからまし
妹の五十の賀に

生出し根さしへたてぬいくみ竹をほ幾千よも陰をならへん
萩原氏四十の賀に園の松と

いつとしもわかぬ常盤の陰しめて安くや君は千代をまつらん
ある人の四十の賀に

世の中のうきを四十ちに過てこそ千年の山の春にあふらん
四十に成ける年

朝ことのねさめばかりは人並にたくれぬ老となりにける哉
宜行が三十三になれるを

れるかなる親になにと願ふ子もよはひばかりはならへとを思ふ
河瀬妹孫女の小林茂がもとにかしつきけるに

植はそへてともに榮はんとはやしの千代まつかけは末もたのもし
正月三日殿の去年江戸にてつかさ進ませ給ひけるよと聞て

色そひし高嶺の松のひとしほにのどかなる世をあふく春哉
舊藩主の若君誕生ありけるを賀し奉る

嶺高き松の木の間に出る日のくもらぬ影を八千代あふかん
飯田年平學校に召れけるとき

春の日の光を窓にまち得てそ集し雪の跡は見はける
年を経て集むとはなき窓の雪さすかにきぬぬ道はありけり

王政復古

行水のくたつ世とこそ歎しか昔にかへるかものかわなみ
御執らしの弓も昔にかへる世は竹の園生の陰にこそ見れ

長歌

嘉永三戌九月三日府に水溢れて家ひたしける時

いかならん神の荒備かあやしきも降くる雨奇敷も吹くる風其雨はたかみかふら
す其風は虎かいふくと人皆の驚くまでに彼山の岩かぬくは此丘の木立倒て賤男
か住る伏屋のまる柱まるひかしつゝをかやもて葺る妻屋もさゝれおす千々にく
たかぬ男等は女携へ女らは其兒抱かへ遠近と迷ひさまよひ浮草のたよふはし
に早川の水泡逆巻行水のいやさやくに瀧ちなすいわき流れて橋の陰ふむ道の
八街は荒海おせば貴人は駒に鞍置供人と人も連ねす賤たまきいやしき子等はこ
とくに栖をすてゝ親も子も男女もこもくゝ手取かはしひた土の高き方にと
のかれ來てさげひもこよひ現とも夢ともわかすあはれこの山おもさくる海あ
せゆく

か須屋翁の雨亭をよめる歌并短歌

花もみち見に来むためと足引の山ふところにて作らせる此かり庵は風まじり雨の
ふる日の雨やとりぞかや刈葺かりそめの庵にはあれとはしげやし見のよろしき
は四の時あく時もなし梓弓春たち來れば彼面には霞棚引此面には花咲とより百
鳥の聲もあはれに若葉さす夏にしなれば時鳥來鳴かたらひとくくりに落くる清
水六月の暑もしらす秋たては砌しみ々に百草の花咲かほしいつしかも時雨の頃
は錦さすそむる木葉を露霜の置てはしぬひみ雪ふる冬のあしたも味むらの友さ
そひ來る松蔭は去と忘れぬふへきとばもかきを折ふしの然のみならず此庵のい
向ひ立る西こそは山も平らに金門なす開なひければろくと海ひを廣み沖さけ
て漕ゆく舟邊つきて漕來る船其船わ嵐にちらふ磯山の木葉の如く遠近にみたれ
て浮ひ千代川の流れも遠く霧にたぬ霞にもれて一入のあはれとゆるあはれこ
の宿にとひ來てこまくに見つゝし居れば春の日も猶長からず家人の待むもし
らすいにしへに有きとふなる漢國の樵こる男の斧の柄をくたしゝためしれもほ

ゆるかも

ふりはへて月に雪にも來る庵を雨にとよふも名にこそ有けれ
嘉永癸丑年六月相摸國浦賀港に亞墨利加國船四艘來通商を乞ふと
ありと開けける時よめ

天地の始の時し神量はかり給て芦原の水穂國は皇祖の御子の命の末長に所知國
と定まれる國にしあれば榊木の彌つきくに日の御子のしらし給ひて山つみの
猛きけだ物わたつみのいかれる魚も玉藻なすよりてつがへて草も木も吾大君の
御おけをしいたゝきさるゝとやとからぬみとのくかたふれいかにほりして
大海の汐の八百會の八潮路をい漕わたりて鳥か鳴東の國の相摸の海浦賀の磯に
何すとか船はよせけん浦はしもさはに有れとも八十國の大政きこしをす遠の朝
廷に遠からぬそれのみかとは大江門の海路の守御國內の船津にはあれと異國の
船津にはあらずいにしへに定給へる不知火のつくしの御門に木つみなすよるへ

き物をさばなくてこゝにまいきぬるやもなきたはわきするはそよことばかり
てや來しそのかみに身のほとしらて寄せ來つる唐土船は荒潮の波にくたがひさ
ゝれなす庭にしつみて一葉たに浮てもいなす成にたるためししらすやかくはか
りくしく尊き日のもとの神のみ稜威を祀ほろかに思ひ量てれちなくもたはわき
なきはずむやけくきたため給へと壯夫はいかりたけるをみかとの廣くゆたけき
御惠の大御こゝろをねもころにさと給ていかり綱とくもかへれと相模津はや
らひましけり然はあれとむさほり深き東らいあくとしらに吾國の寶ほりして玉
くしけ二たひよりは眞金もて船ははるとも車もて船はやるとも物部のやまと心
のいかし鋒いかき貫き舟車きりてはふりて波の上に跡とめましやとはかりに賤
男我も髪を逆立

石上稚憲東行贈別歌

別れはやいつハあれとも夏衣たつてふ時と君が行ま近くなれば月の名のうけき

心を押かへし思ひそかへす大君の御言のまにまいにしへの益荒武雄は渡つ海の
潮の八百會をはろくと船漕わたりから國の遠きわたりに往通ひし人もありけ
りそこもへはあに歎かめや斯ばかり安くゆたけき大みよの旅にしあれば枕にも
草は結はすかれ飯も袖にはもたす驛路のやとりくにもむし衾厚く重て冬とても
寒はしらす夏の日も暑さわすれて夜はいねて晝行道もやくる日の土をはかます
乗物に馬に車につかれたる足どもやすめうら安く君こそゆかめ夏野行をしかの
角の束の間も見ねはいふせしとく行てとく歸り來といはひてまたむ

かなし妹を家には置いて二並の筑波嶺みつゝ住ん君はも

安政元年寅九月十八日難波津に魯國船の來けるよし聞ける時よめ

紀國の熊野の海ハ時しくに鯨もよれ浪早の三津の浦回の大伴の清き水門に沖津
波いよせさわかし荒潮を霧と吹なし磯波をくぬかに立て寄來つる是の大魚は高

照我大君の御食にせんまけにもかもと仇まもる益良武男の逸鳥の早船うかへ漕
出て見し明らめ歸來てまどすどきけは此魚は眞魚にはあらず常世もの醜のたふ
れのけがれたる魚にありけりあはれこのきたなき魚は島のさき磯のさきくこ
ゝたくもかゝのみとふりもろくを吞てもあかす己か身のからむもしらに住吉
の神のしきまず大前のかしこき濱にたゝ寄により來し魚は神をつくあまが得も
のそいて子とも早舟出たせひしなけて波たてさわくいさな取こん

安政二年卯四月七日獵雙兒山時作歌

高照日の皇子吾大君の知食國も平に天下安くはあれと治れる御代にはあれと刈
萱の亂わすれし異國の事ある時に御軍をめし給はむとかねてよりまけのまに
く打向ふ仇はなけれと山はしる毛もの踏たて空かける鳥追立てかりくらの狩
になそらへ百八十の物部つとへしきかへて軍のまねひつらくにとゝのへみむ
ともろくへに命下して殿人どあともひ給ひ浪よする荒磯の上の眞白濱清き原野

に立ちらふ二子の山は陰もよし弓庭によしとけたしくも定ましつゝ鳥の鳴この
曉と時守か告るつゝみに赤駒のいはゆる聲に壯夫の心ふり起しさゝけたるみ旗
のなひき朝風に行手をしめし打放つ飛火の音は雷と空にとゝるき時の間に立る
煙は雨雲とみ空をたほひ並たてる武雄か友の持鋒は冬の林を山風のゆするか如
く負もてる鞆のさつ矢は霜さやくすゝの篠原あら鷲の羽うつなして手握りし梓
の眞弓本末のなみも亂れすつらくに御供つかふるわか君の御いつかしこむか
くしあればぬみしか友の五百つ舟漕はよすとも石火矢は打つらぬとも神ならふ
弓箭の幸にい向ひてなすとあらめやすむやけく漕を歸らむと斗に物も思はず
あしたには服を満たしめ夕には手枕まきてうは玉の夜の戸もさゝす安寝する御
代の恵を仰けもろく

詠 櫻

うらくとがすむ春日に紐解てにはふ櫻はうるはしき神のみ國の敷島のやまと

心に玉相て咲出るものと野に山にしよ榮ぬて二月の咲のどより足引の山分
くらし谷陰のれとろが下も踏したき行てこと見れかくはしき何はあれともうつ
そみのうけき心をなくさめむ言葉の種と皇神のけたしや植し然はかり榮てあれ
と有てよのはてをはかなみ菅の根の長くはあらしと山風の吹もふかすもみ雪な
す散こそまよへかくはかりをよき心壯夫も愛へきものをあはれその花

殿の御前に奇しき玉を奉る人有てそれの歌人如によませ給へるに
石上惟憲か仰を傳て己にもと有けるによみて出せる

うるはしき物の例に白玉は兒にもよそへ赤玉は緒さへ光るといにとへゆほめて
たへて現身の世にもはやす玉はしも澤にあれとも此玉のよそひよろしも荒
金の土ほりたてし山人のほりか出てつるわたつみの潮の八百會の八潮路の庭ふ
み分て蟹の子かよつきや上しおにかくにあやしきまてに奇しかるこれの眞玉文
負へる龜にたくひておけまくも畏きみ世をあたらし世と稀のためしにあらはれし

とぞ思へは是そこの神のたまもの吾君の大御光の彌照にてらしまさむ荒まし
のしるしなるらしいてやかくみちてたらへる大御世につかへし人ら赤玉のあか
くもかもな白玉のさやけからなと朝にけに其玉しひもみかよとらめや

唐人の泣したためはかけもあしくもりなき世に出るしら玉
父の身まかり給ひて神無月初月忌に

神無月しくるよよひに紅葉の過にし君はいつちかもいたりますらんいかにして
よもつひら坂たよ越にこゆ行かすらむ現身の我輩は神かくり隠りまじけるけふ
の日としぬひ合つし神床と拂ひ清めし床上にはひ瓶を居机には木實を盛て鶉
なすいはひもとほり犬自物うつくまりるてうつらくしぬひ奉れは現身といま
しよ時に我をしも呼しよ聲はけふも猶耳の上さらすしはふかひ物とひませし面
影は今見る如くまさやかに残りて有と面影は吾目にもみ其聲は耳にのみしてき
のふまて住て御ませし小床には姿似ませる人たにもなし

某の年正月殿の御前にて酒賜りけるに

千年経て雲に飛とふわたつ海の龍のあきとに有といふ玉の得かたき幸を我はし
得たりあら玉の年の始にかしこくも君の御前にめされつゝ御酒をたまへるたま
はれる此大みきは吾ためのいく薬なり是そこのとなくしゑくし此みきはわか
はあらず我君の御楯とならむものゝふの玉の緒長く結へき露のたまもの然とあ
れはけふのむしろにさしらひて賜はるみきに百千々の齡を延てことしあらは事
にあふへし時しあらは飛も立へくたゝにのみ酔て臥へき酒ならめやは

初春の蓬か島のいく薬たまはるからにゆらく玉の緒

橋本秀峰八十賀に

現身の世にもてはやす種々の寶はあれと玉はあれと玉にもかへす寶にもかへま
くほしき玉の緒の長き齡はほりすとも繼よしをなみもとむとも身に寄來ぬを玉
治はふ神の惠の神さちどうけし君かも春日の空はがすめと眞さやかにまかこく

もらず壯夫の手にとりならず眞弓なす腰もたわます筆取れば鬼神かまけ大空に
かけるふ龍の黒雲に乗れるか如く春駒の千里行なす手力のますら男さひてます
くゝに若いいませは老の浪君にはよせしかくつゝ千代も八千代も榮ゆませ君

いなは川八十瀬をこゆるいは浪の千代も八千世も君によすらし

前のうへの御方紫雲尼 明治七年六月六日東京に歸らせ玉ふ贈別に

よみて奉る

夏衣たつこと安き月日はもいる矢のとくきのふこそ鷹をいにしか足引の山ほと
ゝきす山を出てこゝら鳴なる時しもあれみ里さかりて雲井なす遠き旅路をばる
くゝと都の空に出たゝす君を思へば香細花橋の咲かざる陰もさひしくあやめ草
長き根さしとたのめつるみ園の池の水かゝみ見るもかひなし然はあれとあとき
は佐む常世へにいけん鷹も秋風のたゝはそ歸る時鳥都の空にしほしこと出ぬ
ときげと里かれすもとのふるすに立歸るならひかりけり鳥すらもかくそ有ける

世中はかくそうれしき何しかも我わひをらむふたゝひも又來て見ませ山の名の
久にふるとも松わかばらし

すみかはる月は雲井よへたつともたなし光をよゝにあふかん

近藤某が父の七年の忌に手向すとて陸奥國に行けるとき歌こはれ

父は恰前つ年戦に死
ければよめ墓は一ノ關に在

年月は流るゝ如く行水の早くも過て七かへりめぐりきにけるちゝのみの父の跡
とふ玉祭其奥つきにつかへすと雲井に遠き東路の道奥かどぬ草の若き其子の
れもひ立出たゝすとふうからはあらぬ我身もとりくゝにむつひかはせといに
しへの事は忘れず面影の正目に見ゆて現身の世の事ながら長らへて今も有せば
直香にもこと問はましといひつけむよしもあらんと真かなしみ思ひかへせば
道しらぬ醜のたふれをまつるへと御言負持軍人あともひたてゝ遠近のさかひ造
に行廻り討のすゝみに天放るひなの荒野の朝霜と消にけん人を操かへし忍へは

くゝし雖然命何せんものゝふは名こそをしけれ國の爲め君のみためとひとすち
に身もたなしらす盡しけむいさはは千代にかたり繼いひこそつかめとよめてし
其跡處ねもころにまつりたさめて立歸れ君

草陰の螢をみても飛違ふ火中に消し玉をこそたもへ

前田水穂が七十賀によみて送る

玉釋が氣のよろしき遠世の吾皇神の事はしめ教玉ひて御民らか造作れる大み田
の前田の吾兄は味稻の水穂てふ名を負持て千秋五百秋長秋の遠き榮もいちしろ
く知らるゝうへに現身の世に稀なりと昔より人の言繼七十の齡をさへにつみ上
て世にめつらしき幸人とひとそうらやむうらやめと吾言擧す此君にあかぬ事あ
りあかぬとは何をかいへる此君の名に負たる水穂もてかみなす酒人草のうけ
き心をなこめよと神のぞしへしくしの酒吞さぬのみを然はあれと此酒のみて幾
人が身をあやましてたくひあれば此君にして此辭の有こそよけれ世の中はかく

を理望月のみたぬをよしといにしへの人も言けりかくてこそ満てあふれず加けたるハ欠たるからす幸ひのきはみ成けれかはかりのめて度人は世にを稀なる

年毎にうちかへしてはつくくる田の限もあらし君のよはひは

明治十四年五月廿日榎本清蔭の一周祭に

文机にふみ取ならへうるはしき吾友垣を誰かれとあきかそふれは大かたは無か多くも成にたるあはれうき世とあつしぬひかつなけきつうつらく睡るともなき窓の外に松風立て芦廉動くと見ればゆくりなく榎本吾兄が北にめて妻屋のはしのき薙に來入てあればあなゆかしあなめつらしも此ほとろあはても久し何事のけふは爲なと其面の色に出るまてくみかはし酔のすゝみのすゝると常にやはらずもたもなくかたりかはしてはらくは有けるまにまをすのとは呼人ありていさくと立んとするをまてしはし然いそきをと斗に我よふ聲の忽に耳にこたへてはかなくも夢は覺にきあやしくも見にける夢が奇しくも逢見し事とつ

らくに思ひかへせは夢のまに過し一とせ一めぐり別れし去年の月も日もけふといか今日正やかにまみぬまじけめよもつ路を現の時と世をさかり國へたてよも吾兄子をわかしのみことと吾兄子もたぬすを吾をたほすらんはや

愚かにも跡しのふかを見ても猶いやはかなる夢としりつゝ

明治十四年六月十日妻の十七回靈祭によめる

行水の流るゝかことを車のめくるふなして年月のたつと早く我妻にわかれし時をつくくとしのひかへせはうつゝとも夢ともわかす夢のまに十年にあまる七年のけふにもあひぬ今日といへはその過し世の面影も正目にうかひそのかみの事のとく思ひ出る心にしみてあちきかくよにながらへし老の身につむうき事もしくくにかつかこたれて夜もすからいまだにいねすうつらく物思ひをれば死出の山こぬてくるてふ郭公吾手枕にねちかへりねちかへりなげと吾しのふ昔の聲はきくよしとなし

あはれにも來ては音を鳴時鳥むかしをしぬふ宿としりきや
しのふ草しけき軒はにもる雨の雫にたへぬけふの袖かな
立かへる人こそ見ぬぬめぐりこしけふは昔にあふ心ちして

明治十四年鳥取縣再置を祝てよめる

安見し、吾大君の知食國は雖多八束穗のいなはの國ハ味稻の名にこそ負れ宮こ
へを遠くへなれる山陰のせき國なはいにし年命下りて八雲立いつも島根のみ
縣に令屬給然しつゝ有けるからに何事のよむはわかぬと小薄の片よる風にちる
露の潤ひ兼てしつたまき賤輩は冬草の萎々如く年のはに日にけに瘠てまつしき
か多くなりつゝ水かれし野澤に喘く魚の如患さまよひ嵐ふくらのよとさよのさ
やくにさやくとさよと遠音には聞ぬにけらしおしこきや吾大君の此國は君の
御國此民は君のみ民と御心にあはれみまして又更に昔に歸しみあかたのつか
されおると此ほとろきこゆるからにみお月のかふつく眞日に天つ水くたるか如

くよろこひの眉打ひらき麻衣短き袖を搔たれて立而見居而見今よりはもたはあ
らしと明らけきみ世どあふぬ民草もかこ

置わたす惠の露にいなは山草木うるほふ秋は來にけり

なげきの露

今は世にかひなき老のくりことながら心のやみのはれかたき日頃のつれくゝお
るすきひにせめてもとありこし事ともいさゝかかひつけ置て其さましらぬいと
けなき子らか後の思ひ出草にもなさはやとてなんちせ子は天保五年といふ年の
十月廿六日生れて我妻と二人の中にはしめてまふけたる兒なれば老たる親人た
ちのいとらうたき物にして手のうちの玉といつくしみ給ふにのれらめ豆ら
しく外にまきるゝものゝなげれはいとをしみはくゝみ育てたるか幼きより心さ
まおたひにこめきてすなほあるそのさか常の子ともにはやうかはりてかりをめ
の遊ひすきひにもはらたて物あらそひなとせしことなくて隣あたりの人々にも
うつくしまれつゝ三歳はかりの頃百人一首の歌をよみて聞せこゝろむるほとに
あし引のといへは人丸をさして是なりと云花の色はといへは小野小町をさして
答など十四五首はかりは心得て取違さりしまた五ッ六ッはかりの程より糸つむ

き針とることなと母のをしゆるにしたがひてなし覺ぬ七つの年は入江何かしの
翁に手習ふ業をぞしつらひ月に二度三度はかり來りてをしつられしに大方の
子ともよりはよく覺ゆるとて常にほめられきされと母なる人の女はいくほとか
く他の家にかしつきて萬のこと取まかなふへき身なれば第一織縫の手わざつた
なくては叶かたしとしてその方をむねとをしつて筆とり物よむことはさしも力を
用へさりければ自の心には口をしと思ひたりしさまなりさはいつといとま
には我心として捨さりしかは中らひにては是かれ人言もある物なれば一たひ二
たひ巳もいなみたれとせちに乞はれけるまゝにすつなくては其ころに任せたり
しははたとせはかり昔になんそのうち寡婦となり姑の身まかり玉ひ宜行の妻を
めとりて家のうち取れさめしほとのことともはいつはぬに中くに言盡すへく
もあらずみまかれが心れきてして舅につかへ宜行か仕の道に進みて子供さへ多
く生出て家の業さへもとの如く立たるは女の身にてはいと安からぬこと成し

そがしかくいへは我子ほむるとや人はいふらんされと己が身を思はずして家に
つくしたる功は男子たに中くかたきとなれば此事忘れさらん爲に宜行にも常
にかたり聞かせ我ほめに書れくなり又我妻なる人のうせにし後はかてくはへ
て我着る物などの事まかなひ得させつひとせ米子に物しける時などは老ての
後の旅住居をころもとなかりて付そひ行てかしこにては我神官つかさ勤かつ
兼て知人さへ多くて明くれの人の出いるにつけて萬のこと取まかなひかと思ひ
の外のとかにもあらさりしをいましはと落つきたらんにはさもあらむこむか
こめつらしき處を伴ひ行て見せんといひなくさめたりしを思ひかけすたのれ
秋の末つかたよりいたくわつらひてほとく此世のものとも覺ぬさりしをまた
く彼かこころのかきりみとりくれたりしに助られて二たひ家をも世をも見る事
とこそなりにしかかゝれば出雲の大社をもたかませず大神山にも登らずしてそ
歸りしがこころをさへある世をふるほとにちかき年頃は御世のさまあらたまりて

何事も昔には事かはり誰か家も行末の覺束なさのみ心にかゝれば思ひまうけた
るあらまじこともほひとけすて世のいとなみにかゝつらふをそれにしたかひて
は織縫するひまゝには綾錦さいてなと取集て押繪といふ物を手すきひにこし
らへて是かれ人にあたへ物にかへなとせしも大かたの人の手すきひにはまされ
りと人にも云れて絶すもとのめらるゝ方さへ有しも今ハはかなきかたみとこそ成
けれ家の幼き子等さへやゝたとかひて今より後はのとかなる世をも經てかやう
のわざはた風流ことにも心をよせて老きたのしめよとて木芽煮る時なと勝手取
まかまはせしにみつからの考もて料理なとも時にしたかひてまうけしもさして
習ひたるには非すしてその趣に叶へることも有しになむかゝりしほとに此六月
三日はかりよりいさゝか腦ぬるよし聞かれと只かりそめの風の氣なとにやと心
にもとめすして日を経しにその頃何くれとさばること有て行ても見さりしかは
十日はかりの頃訪ゆきて見るに猶おなしさまなりといへは宜行にもくすしの事

なとかたらひてさらば已れ芦笏氏に行て診察たのみ薬乞はんとて直に行て此は
との有さまをもくはしく語りてさて歸りたるに前島翁が來りて兼てやくしたる
日和もよければ湖山の里絹川氏に行て夕暮に及ひたれば舟にて吉岡に伴はれて
湯あみして歸りて聞けば猶同しさまなりといふに十四日の朝行ていかにそと聞
にさしてかはりたるさまにはあらぬと猶心よからぬよし聞てしはしめて歸しを
晝過る頃今たゝ今來よとあわたゝしく告來るに打驚れて胸打さわき足ふむ處も
おほぬすいそき行て見ればさまかはりていためる處服より胸先にせまりて息も
なぬゝに苦しかれはこはいかゝせんとも心もそらになしくてたゝくすしの人
々是かれと招き神に佛に祈かけぬかたもなく親しき限りみなとひ來てさまゝ
心をつくし薬をととりく用うるほとにやうく其夜明かた近き頃少しゆるひ
たるに我人いさゝか心ちちめてそれより日とにかたはらさらす心へたれとか
にかくに物喰ふこと成難く米つふ咽喉を越ぬされはれものゝしるはかりをちい

さき器に一口ふた口吞ばかりをたけき事にして日を送ればおほつがなくは思ひ
なから醫師たちのいはるゝには病は輕みたり今しはしあらはものすゝむことあ
るゝとあるになくさめてけふは明日はとたのみつゝ有けるをひたよはりによ
わりつゝ終に廿四日といふ晝下りにむなく息絶ぬいはんすへせんすゝしらす
只夢のやうに思ひまゝとゝ其ほととの事とゝをかく書するして昔をしのふたより
にとて文月十七日雨いみしう降窓のうちにしるし置ぬ
たほかたの世どうきものと思ひしは數にもあらぬ歎きなりけり
其頃よめる歌ともあとききわかぬと

老の浪重ねとはてを思ひきやさかさま川にしつむゝことは
歸りこんよしもあらぬをわたり川何に涙の水まさるらむ
出て行道にきぬぬる燈火の影をこの世の別れなるらん
かへりこぬ門にたく火の煙にもむせふ思ひは立そはりつゝ

今はとて別るゝ門の道芝にとゝまるものはなみたかりけり
跡したふたまの行ゝもあるものをきぬかへりても飛ぶ螢かな
終に行道のかとてを送る迄れくれて残る老の身そうき
老か身の明かたちかき短夜もこの世のやみに猶まよふ哉
今朝までも親の老こそ歎しか先たつ身とは露しらすして
たのみこし我なき跡をさかさまにかへして歎くけふのはかなさ
手向すとをればこほれて紅に花をもそむる我なみた哉
かわく世もあらしとを思ふ我袖にかれしと萩が露をかけつゝ
秋またてかれしとはきかもとの露末の雫もあはれいつ迄
袖ぬらす涙の雨のはれぬ夜に友なきすなり山ほとゝきす
行末をいはひて千世とよひにしは長き歎きの名にこそ有けれ
昔今いつとをさしてか夢といはんうつゝともなききのふけふ哉

みの虫のちよとなくにもうせし子どしのふ涙は雨とこそふれ
死出の山こひて來なかは時鳥思ふたよりのひと聲もかな
なくてたにあれはある世をひと夜たに何しが家を出かてにせし
もろかりと面影しのふ朝貝に涙の露のたかぬまもかし
さみたれの空にもひまはある物をはるまもなき袖の雨哉
さきたぬくいのやちたひかひもなき歎きせよとて残り我身か
かゝる世もありける物をなからへて幸ある身とは何思ひけん
れそくとくきぬをあらそふ露の世と思ひわけてもぬる袖哉
わすれてはなを歸らぬとまたれけり世になき予とは思ひしるく
この世には心とめしと思ふ身も老て残れる末そかなしき
露の身のきゆる今はも老草の末のことのみかけきしをばや
打いていへははかなき言の葉の露にも袖はぬれまさりつゝ

忘れなんとはかり空をなめても軒のしのふの露こほれつゝ
藤衣さかさまにして見る夢は猶も昔のうつゝなりけり
ふく風も常なき宿のかなしさはまたきに秋の心地さへして
露草の花咲見ても秋をたにまたて枯にしこ萩をそ思ふ
ながめつゝひるまもしらぬ袖の上にかけてそしのふ朝顔の露

七月六日の夜

星たにもまれにあふ夜と聞ものをまつかひもなき宿のかなしさ
二七日にあたれる前の夜

くりがしと思へはかなし別れつる其日さへたに遠さかりつゝ
七月十日はかり驚の日ことになきければ

驚もなく音ぞそへて常ならぬ宿のなげきを來てはとふらん
初月忌に

さめやらぬ夢の夜頃をたるとまに十日廿日はいつ過にけん
若草のものとの雫を歎く身も今いく程の露の宿りそ
咲はまつ見せんと思ひし萩か花けふの手向に折も口をし
老か世の別れは兼て知なからたくれん身とは思はきりしを
燈籠をつかはしける時

なき影のうつるとはなき燈火も心の屋みのしるしはかりそ

本性の父翁は幼くいましむ頃より歌よむわさに心を
入れてあまた年月を經給ふからに其歌數も多かれと
も古き詠草はつぎく反古となり又彼是にちりほひ
失せぬ斯くては年頃心つくし給ひし跡も残りなくな
らんと思ひかねてみ心に叶ひたる歌撰り置給へとこ
ひ申し、は自らもさ思ふとうへなひ玉ひきされとい
つと限れることあらねは何くれとことのみぎれにけ
ふあすと送り給へる内明治廿四年の冬より風のこと
ちにてやみふし給ひしか辛うしていは玉ふ引續き老
のいたづきにて心ち常ならずやゝくにねとろへ給

ひ終に同廿七年一月身まかり給ひぬるは誠にかなし
ともかなしき限りにころさして新貞老翁は父翁の友に
しあれば右のよしを告て残りある詠草又は反古の如
くにかいしるされたるものを集めてさるへき歌もあ
らは点くわへてよとこひしに心よくうへなひねもこ
ろにしるし給ひぬるを書つらね一と巻となしてこん
年の靈祭のみてくらとて現身の世にまじり時したし
み給ひし人々又うみの子どもがしぬひ草にわかたは
やとゆくはものし侍りぬ
まきねけることの葉草のかすくと

かたみにつみてぬらす袖かな

明治三十年六月

小山宜行

回水園中嶋翁の家集と摺卷に物せんとうみの子
小山宜行ぬし親ねもふ真心にいろしみつゝこれ
か端に一言とどうなかさるれともいまろかりし
時のことともはつばらに湯本ぬしのはしかきに
盡されたれば拙き筆もて今更何事とかしるさま
したゝ回水園の名によりたみ聲に一言うたひて
稱へ申さんとす

久松の城のへの池邊ゆきめくる水は氏なる中島にふ
さばしゆりと園の名にかけてすみけんはときやしわ
かせの叟ハ若子としいへりし時ゆ公の事につかふと

歌偲ひ物學ひすと二筋の道ゆきなりし歲月にいろし
みませはつかつとる君にめくまぬ教つとる人らいや
まいあら玉の年の緒長く八十とせにあまる八とせを
たゆみなく間なく時なくよるひるの時をもわかす盡
しつる心ともしもつらくに思ひかへせば行水の業
に習ふとたほせけん園の名ならし其園をめぐる眞清
水ゆくらくたゆることなく世々久にいくろの人か
めてむ此卷

明治三十年五月

新 貞 老

明治三十九年五月五日印刷
明治卅九年五月十四日發行

(定價金三十五錢)

編纂者兼
發行所

鳥取縣鳥取市大工町頭一番地
小山 山 宜 行

印刷者

全縣全市上魚町二十番地
松 村 亮

發賣所

全縣全市全町四十五番地
横 山 敬 次 郎

全

全縣全市全町五十六番地
山 本 文 林 堂

187

426

